

特集

いじめ-排除する思想

複眼で見る〈いじめ〉 藤田 悟  
異文化を鏡にする

吉田 敦彦  
「いじめ」への  
ホリスティックなアプローチ

「多様性」の困難をめぐって  
堀田 碧

We

6

1997

くらしと教育をつなぐWe



女と男の家庭科新時代

# 夏の教育・福祉視察旅行

●スウェーデン・フィンランド●

## 教育・福祉・分権 視察旅行

8月19日～8月29日(9泊11日) 578,000円  
スウェーデンで保育所、いじめ相談施設、小中学校、高等学校、成人学校、高齢者施設など、フィンランドで保育所、小中学校、シュタイナー学校、高齢者施設、地方分権の講義と視察で本当の豊かさを学びます。

●デンマーク・スウェーデン●

## 高齢者介護視察旅行

8月19日～8月28日(8泊10日) 536,000円  
デンマークで老人ホーム、高齢者センター、介護器具センターなど、スウェーデンで痴呆性老人グループホーム、サービスハウス、ナーシングホーム、老人ホームなどを視察して、北欧の福祉の質を実感します。

●スウェーデン・デンマーク●

## 障害児教育視察旅行

8月20日～8月29日(8泊10日) 548,000円  
スウェーデンで障害児ハビリテーション施設、障害児のいる小学校、知的障害者施設、デンマークで作業所、特別養護保育園、情緒障害児通所治療施設などの視察と講義で、障害児教育の現状と目標、ノーマリゼーションなどを学びます。

問い合わせ先・受託販売：(株)ホライゾン

☎ 03-3770-0149

FAX 03-3770-0728

東京都臨海研修旅行業第3515号 (社)日本旅行業協会会員  
〒150 東京都渋谷区桜丘2-3 富士商事ビル3階

旅行主催：(株)道祖神

運輸大臣登録一般旅行業第757号

.....知りたい情報をお載せて10日おきに届きます.....

さべつ・おんな・アジア  
はたらく・がっこう・若い  
たべもの・からだ・老い  
かんきょう・かんけい  
自分史・映画・CD  
書評・マンガ・読者の声  
集会・催し.....



創刊50年をすぎました。  
女の視点で創る  
もう1つのメディア  
全国の草の根の動きを  
つたえます。

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ

年間購読料 9000円  
東京都渋谷区神宮前3-31-18  
Tel 03(3402)3244,3238  
FAX 03(3401)3453  
Tel 06(371)2429(大阪支局)

女たちの情報紙

ふえみん  
f e m i n

婦 人 民 主 新 聞  
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

97年6月号

くらしと教育をつなぐ

We

◆ 特集 いじめ—排除する思想 ◆



Tami

## 連 載

- シネマの魔 武田 秀夫 ……46
  - いきいきごんぼ 桑田 良彦 ……50
  - 変な子じゃないよね 滝野澤直子 ……52
  - このままではいけない? 吉原 令子 ……54
  - リレーエッセイ  
セックスレスなわたしたち 西浦 佳代 ……56
  - 蔦森樹の巡業日記 蔦森 樹 …… 58
  - 居場所考 水田 宗子 ……59
  - おんなが歳をとるということ 木村 栄 …… 62
- 
- ◇ 読者のひろば …………… 63
  - ◇ 編集後記 …………… 65



特集 いじめ — 排除する思想

《インタビュー》 複眼でみる  
藤田 悟さん (聞き手/稲邑恭子)  
異文化を鏡にする …… 4

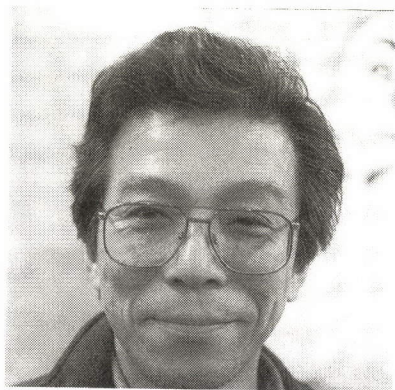
- ☆ 「いじめ」への  
ホリスティックなアプローチ 吉田 敦彦 ……12
- ☆ PTAなんていない? 谷辺 葉 ……21
- ☆ 「多様性」の困難をめぐって 堀田 碧 ……25

女と男の家庭科新時代

- フェンスを越えて 小平 陽一 ……32
- 家庭科—風がかわる匂いがかわる 藤原 裕子 ……33
- 楽市楽座 加藤 昭仁 ……38
- かる〜い家庭科相談室 家庭科編集室 ……40
- 共学家庭科 論争 安原 千夏・篠原 りえ ……42
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 ……45

# 異文化を鏡にする

藤田 悟さん



インタビュー  
複眼で見る

(聞き手・まとめ／稲邑恭子)

大学で言語教育や比較文化を教える藤田さんは、お連れ合いの妙子さんと月刊誌『子どもとゆく』を発行している。藤田さんの『いじめ』および「登校拒否」に関する比較文化的覚え書き』という論文を読んで、ぜひお話を伺いたいと思いました。

## ●プロフィール

ふじた・さとし一九四八年東京生まれ。茨城キリスト教大学教員。著書に『ベーパーバック読快術』(アルク)など。「別冊宝島・学校が合わない親と子のための学校に行かない進学ガイド」編著。八九〜九〇年、米国オハイオ州アンティオーク大学客員教員。(この経験から妙子さんが『オハイオ・二重気』のなぞ)現代書館、を書かれた。最近は、*Teachers in Different Cultures* という調査に取り組む。

## 日本のいじめは排除

稲邑 いじめについては評論したり分析したりする人はたくさんいるのに、そのことが現実的な解決に結びついていないような気がしているのですが。

藤田 いじめに関しては結論を急ぐ傾向があると感じています。よく差別もいじめも「撲滅しよう」と言うけど、よく考えたらそうはいかないのじゃないか。もうちょっと距離を取って見たほうが、まともに理解できるのではないかと気がしています。その意味では僕の「覚え書き」は理解を深めるワン・ステップだと思っています。「いじめの国際比較」とか言いますが、僕の書いたものにしても、印象を拾ってきただけのもので、本当に客観的な比較は不可能なのじゃないかと思っています。言葉や文化の壁がありますから、通訳を通すと、話が合っているようで合わない、意味が微妙に違っているんですね。ですから、昨年、英国から来日した生徒たちによる「アンチ・ブライニング・キャンペーン」のワークショップもある種の「薬」にはなるだろうけど、日本のいじめ問題に正面から応えるものにはならないでしょうね。日本でいじめを定義すると「集団からの排除」とか、「仲間外れ」の要素が主要な要素として入りますが、他の国のい

じめに似た現象を調べると、どうも「排除」の要素はあまり強くないんです。

日本人はお互いに寄りかかって成り立っているから「周りの皆様」が頼りで、集団から排除されるのはつらいことになるのだけど、キリスト教文化圏などでは各々が完全な一人として成り立っているのが前提だから、排除されてもそれはそんなにつらいこととして認識されないようです。少しでも欧米の文化圏で暮らしてみると分かるのだけど、日本にいて自立したいと思ってるのと比較にならないほど、向こうでは人と人とのあいだに厳然とした溝があるんですね。神様と自分の関係がまずある。自分で立っているつらさはあるが、他人にもたれかかるような意識は少ない。だから日本風の排除をされたとしても、そんなにこたえない。それに対し、日本人は他人との関係があつてこそ自分があるのであつて、集団から切られたら自分でなくなってしまう。

米国人の学生にいじめのことを聞くと、「グループで仲間外れになつたらほかのグループで遊べばいい、何でそれが問題になるのか」と不思議に思うらしいし、いじめられたことを親に言うと、親は「おまえは悪くない、彼らが悪い」と言ってくれる、それが支えになる、と言

うんです。たとえば、ノルウエーは欧米の中では比較的集団を大事にする国ですが、それでも、はじめの第一次兆候といえば、物理的ないしは言葉による暴力の行使や金品の強要であり、「仲間外れ」の要素はあくまで第二次的兆候として上げられています。その意味で言えば、登校拒否も日本特有の現象と言えましょう。他の国ではそんなに全員が全員、学校に行かなくてはならないという強迫的な思い込みはないですから、学校に行っていない子どもは多くても問題にならない。

受験地獄がはじめを引き起こしたとよく言われるが、受験地獄を言うなら、僕たちこそ、それを一番マジにやった世代です。しかし今のようにはじめが問題化されることはなかった。少なくとも、僕たちの時代は「勉強して偉くなる」という共通の目的を持っていた。今はその「勉強価値」の神話が崩壊して、「勉強することがそれほど役立たないかもしれない」ということをみんなが素直に思ったり言えたりする時代になった。自分の目的にコツコツ向かうことが全体の集団の価値に共同で参加することだったのが、今はそういう価値さえなくなってしまうのです。そのように社会の全体の方向付けがなくなると、日本のように神や普遍的真理などの超越的な価値

がない社会では、形骸化した集団に帰属することだけを重視し守ろうとする傾向がますます強くなってきます。

### もめごとを作る

稲邑 私には子どもが義務教育を終えたとき、何ともいえない解放感があったのです。上の子どもたちが二歳と三歳の時から四年ほど、ロンドンにいたのですが、四歳から小学校が始まるのだけど、入学式はないし、運動会もほとんど練習の形跡の見られないような、日本人から見ると拍子抜けするような簡単なものだったし、教科書も筆記用具も貸与なので手ぶらの通学で忘れ物の心配をする必要なし、すべて必要最小限で成り立っていたので、帰ってきて日本の学校の至れり尽くせりというか、ごていねいなのにびびくりしたし、これは親も教師も疲れるなとも思ったんですね。細かい算数の道具にいちいち名前前は付けるし、毎週のように上履きや給食の上っ張りを洗濯に持って帰ってくるし、プリントを配れば事足りると思うような行事の説明で召集がかかったりするし。

藤田 確かにうつつというですね。上の子どもが小学校に入った十二年前に、まず思ったのは、「複雑さという暴力だな」ということでした。ただ、八九年に米国に行



く前は日本の運動会を軍事教練みたいだと思つたのに、帰つて来て改めて見ると感動したんですよ、あの組織力というものに。米国では教師の連携もほとんどない、職員室はなくて、食事したりお茶を飲む場所があるだけ。教師は校長が一本釣りで雇うから教師同士でも統一がとれないから、運動会の予行演習などはできません。昼食は生徒と別にとる。全校朝礼も帰りの会も掃除の時間もなく、全員参加の行事もほとんどなく、服装指導もない。日米の小学校五年生を比べると週あたりの学科の授業時間は米国のほうが三十分長いけど、子どもが学校に居る時間は日本が五時間長いという調査結果が出ています。これは授業以外の活動に当てられる時間が長いからです。日本は何でも共同作業でしょう。給食、掃除、児童会、クラス委員、係、日直、いわゆるお勉強じゃない部分がすごく多い。学校を社会に見立てて、集団生活の学習をさせている。

**稲邑** 欧米だったら、学校の守備範囲ではないと切り離すものを全部抱え込むから、先生の仕事が膨大になる。

**藤田** ある米国人の研究者は「全人教育」と言ってますけど、学校がいろいろ抱え込むと同時に、仕事を専門化して分けていかなければ大変ですね。しかも人間関係の

もめごとが起きるようにセツトされている。

**稲邑** もめごとが起きるようにセツトされているのはいいことだと思うけど、そのもめごとがほんとうにお互いを鍛える機会になつていないような気がするのですが。自己主張しないで周りの人の顔色見て穏便に済ませるような解決では何もならないのではないかと。

**藤田** 十分うまく働いているとはもちろん思いません。でも、少なくともそのもめごとをどう収めるかという体験をする機会は日本のほうが与えられる。むしろでは幼稚園でも暴力は絶対にダメで、大人の暴力と同じに考えられます。日本では小学校の中学年頃ならば平気で喧嘩させているし、むしろ、昔はもっと喧嘩していたのにいまの子はそれができないということが問題とされているくらいですが、米国では幼稚園の教員は子どもといっしょに遊んでいない、立って監視している。暴力はだめで、言葉で言いなさいと、すぐに割って入ります。

**稲邑** すぐ裁判沙汰になる国だから？

**藤田** それもあるけど、もともと暴力はいけないうつてことが強い。日本人は「ぶつかるなかで学ぶ」と放つておくところがある。もめても泣いてもすぐに教師が裁きに



行かないし、子どもが自由に遊ぶ時間が長いというのが、米国人の見た日本の幼稚園や小学校の印象です。

神様で裁いたり、真理で裁いたりすると、自分たちで納得いくように話し合いなさいというのの違いですね。弁護士の数は人口比で米国は日本の四十倍だと言われています。それだけ彼らは自己主張するんだという話として扱われているけど、それは違うんじゃないか、自分でいざこざを処理できないから代弁してもらおう、自己主張が強すぎて紛争解決能力が低いから他人を雇うんじゃないかと思う。このごろはコンフリクト・リゾルーションというのが言われ出してきましたが、お互いに相手の話をよく聞くとか、日本では常識のようなことです。

**稲邑** 確かに欧米圏では人の話を聞くより喋れる事が大事ですよね。表現しないと存在しないと見なされる。

**藤田** 分かっているも分かんなくてもいいからとにかく発言することに価値がある。分かっているも黙ってじつとしているのは価値がない。

**稲邑** 日本では受信能力が結構評価される。むしろは発信に偏っていますよね。頭の中をいっぱいにしてとにかく喋る。話を聴くときは入ってきやすいように頭を空っぽにしていたほうがいいのですが。

**藤田** 表現を重視するか、理解を重視するかということでしょう。それから、日本の学校は子供同士のコミュニケーションを重視しますから、騒がしくても許容する。結構うるさくても話し合うことでそこから学んでいるはずだと放っておきます。米国では教師と個々の子どもたちとのコミュニケーションが重視されるので、先生の話や静粛に聞くことが要求されます。もめごとはいいことなんです。問題が起きたら隠すことを考えたり責任者を追及するのではなく、紛争解決が教師の仕事だと思えば、ずいぶん違ってくる。日の丸でも何でもめる場面があるということ、どちらかにパッと決められちゃうよりいいんです。

**稲邑** でも周りを見て周りに合わせることで足を掬われることになりませんか。例えば、戦後民主主義教育だとして「ひとりの悲しみがみんなの悲しみとなり、みんなの喜びがひとりの喜びとなる」から出発したのに、もともと集団主義的な土壌があつたために結果的には「みんないっしょに」の強要になってしまったのではないかと。

**藤田** 個人の責任で完全に個人プレーでやることってほとんど思いつかないんですね。社会生活の場面で複数の人間がかんでやることではお互いに足を掬い合うのが当

然ではないか。出来上がりには自分の意図も何かの形で反映されているけど、そのまま出てはいない。それでいいんじゃないか。多数決でバサツと切るやり方はコンセンサスをぐずぐずと煮詰めてつくっていく面倒さをバイパスするわけで、基本的には参加者を賢くしていかない方式だと思いますね。

「みんないっしょに」で思うのは貧富の格差の問題ですね。日本では「みんないっしょに」が底辺をかなり引き上げることに成功した。収入の高い方からの家計収入二〇%と低い方のその比が日本では四対一くらい。米国では十対一くらいですから、みんなが中産階級と思っても無理はない。この「みんないっしょに」が他方では登校拒否の子どもたちにとっては諸悪の根源に見えてくるわけで、事態は一筋縄ではいきません。

社会の収まり方というのは、お互いを見てはらはらしながらコンセンサスを探り出して収めていくような収まり方か、あるいは神様か法律かという形で上から縛られるかどちらかでしょう。神様とか真理は誰かが作って神に代わってお告げをするので、権力の一極集中状態になりやすい。それに比べれば、気苦労はするけど、こつちかなあつちかなと周りを見回すことでやっていくほうが

権力は分散して価値観の多様性が認められるのではないか。ただ、それがうまく運用されるためには、何か、社会の方向付けみたいなものが必要でしょうね。今までは「経済建設」という価値だったけど、これからはまるで違った価値観が必要だと思います。

いま、勤務先の大学で海外の大学との交換プログラムをやっています。たいていはお互いに得になるようなことでプログラムを作るのだけど、スウェーデンの高等教育の担当の人と会うと、どうも、どこで得をしようとしているのかわかりにくい熱意の示し方をするんですね。米国の場合は明らかに学費儲けですが、スウェーデンの場合、学費がただで奨学金がついたりする。留学生を呼んで教えて何が儲かるのか。スウェーデンという国や文化に理解を示す外国人を何しろ増やしたいから、国の支出が増えてもいいということらしい。教育という仕事だと採算は度外視しそれだけに専念しているように見える。日本の今後を考えると参考になります。

ひとつ間違うと変な言い方になるのだけど、日本の社会はどちらに向かっていくかについてのまとまりみたいなものが必要なのではないかと思えます。「周りの皆様いかがでしょう」がもつと広がって行くようなかたち、

これならいいよねというのが下からできてくるようなことがあればいいですね。

**稲邑** そういうときに強力なものにすがりたくなくなるけど、強力だとオウム真理教みたいになるから、もっと柔らかかというか、融通のきく価値観がいいんでしようね。

**藤田** オウムの事件は価値の喪失状態が耐えられなくなっている証拠でしょうね。上からぶら下がってくるオウムみたいな価値ではなくて僕たちの中で練り上げていく価値でないよ。

### 日本の近代化

**藤田** 日本の近代化は実のところ西欧化ではなくて、日本独自の近代化をやってきたのだと思います。西洋のレッテルを張りながら内実は日本風のことをかなりやってきたのですが、その亀裂が今、よく見えてきた。「だから日本は遅れている、個を確立しなきゃいけない」と言えば話はすっきりきれいに行くけど、でも個を確立したことになって西歐も、実はうまく行っていない。「もっと西欧化」でない方向へ展開しないと。

**稲邑** 受信能力にすぐれていること自体はいいけど、問題はそこでどうしたら相手に巻き込まれないで立ってい

られるか、動かないでいられるかということ。私たち日本人にはそれが難しい。

**藤田** ワンクツションをおけるかどうかですね。いじめの問題も、昔はいじめっ子がいたりしても、これ以上やるとダメというのがやるほうにも分かっていたし、やられるほうも持ちこたえることができた。ある種のルールがあつたのには無法状態になつた。

**稲邑** 逃げ場がなくなつたのですね。昔はつらいことがあつても、自然でも動物を相手でも子どもがひとり自分を回復できる場があつた。家に帰つても放つて置かれてひとりにさせてくれた。そのひとりにさせてくれない、自分だけになれる空間がないということがきつい。

**藤田** 西欧的な意味での自己確立ではないけれど、でも自分はこうだというのがある種持つている。もたれあい否定しないが、それに頼り切らない。もめごとを処理しつつ後ろに引いていられるようなそういう人間の立ち方が必要なのでしょうね。

**稲邑** 西歐人は個人の防壁が強いから、対人関係は至近距離でも耐えられる。日本人は防壁が弱くて影響されやすいから距離を取らないと耐えられないんじゃないかと思うんですが。



藤田 日本人の対人関係は緊張度が低いほうが楽ですね。知らない人とは一緒にいると居心地悪く感じる。

稲邑 緊張の高さに耐えられないんですね。

藤田 ふわーんとお互い柔らかくできる空間を前提にしている。西洋人はそばにいても基本的に敵なわけだから居心地の良さにそれ程関心を払わないというか。日本人は心地良さへの期待値がすごく高く居心地の良さを追求する。お風呂が好きでしょう。子宮にいた頃を思い出しているのかと思うけど、それでほんとに幸せになる。だからちよっと何か問題が起きると大騒ぎする面がある。人の心を感じ取ったりする感受性の高さや美的な感覚の鋭さはできれば失いたくないのだけど。

稲邑 そういう微妙な受信能力を生かした感じの生き延び方を出来ればいいのですが。強くするとか、甲羅を堅くするのではなく、弱いまま、逃がしたりそらしたりできないかど。このごろの若い人は防壁の薄い人が増えているような気がするんです。だから、強くなつてやり返せではなく、巻き込まれないでかわすとか逃げろとか教えた方がいいんじゃないかど思うようになった。

だいたい日本人は他の国民と比べて自己評価が低くて他から侵入されやすいと思うので。「在るべき理想

像」がやたら高くて自分はまだまだと強迫的になる。自分にほどほどに充足していられないと生きがたい。

藤田 「排外」と「拝外」なんて言うように両面ありますよね。「外圧」にすごく弱いかと思えば日本全体としては結構「私は私でいい」というスタイルでやってきている面もあるんですね。これだけ西洋化していても、お風呂は欠かさず入る。伝統的なものを排除した音楽や体育など学校教育のある部分はかなりひどいと思うが、社会全体としては例えば食べ物など、摂りたいものしか摂っていない。態度は小心者風のくせにかなりしぶとい。

ただ、一つのジレンマは日本人が完璧主義で勉強好きだということ。勉強好きというのはどっちかという自信がない、自分に不足があるから学ぶわけで、これはジレンマなんです。学ぶことは豊かになるからいいんだけど、自分には不足があると思わないで学ぶ態度はとれないだろうか。今の状態でもいいんだけどと思いつながら学び続けられるといい。経済的富も知的な富も相対化できる視点がほしいですね。

「子どもとゆく」は十二号分年間購読料4500円

申込はTEL/FAX 03-3720-8149

〒145 大田区東雪谷4-5-1

特集  
いじめ一排除する思想

「いじめ」への  
ホリスティックなアプローチ  
吉田 敦彦

「いじめるより仲良くした方が楽しい」

昨年『喜びはいじめを越える』（春秋社）という書名の本を出した。この本でも紹介したエピソードだけけど、メキシコ市にあるメキシコ人が学ぶ学校（日本メキシコ学院のメキシコ・コース）で教師をしていたときに、こんなことがあった。

日本から送られてきた新聞にあった「葬式ごっこ、いじめによる自殺」の記事にやるせない思いを抱えたまま、

思い切って高校一年生の「日本語・日本文化」の授業でその記事を配った。読み進むにつれ、いつも愉快でにぎやかな教室に沈痛な空気が流れ、一人の生徒が「わからない」と言葉を発した。「いじめ」がわからない。メキシコの言語への適当な訳語もないようだし、あれこれと説明を加えてみるが、みんな首をかしげている。しばらく考え込んでいた別の生徒が、ポツリと言った。「わからない。だって、仲よくした方が楽しいのに、どうして楽しくないことをわざわざするの?」「そうそう、それがわからない」と相づちが広がる。



ハツとした。「いじめるよりも、仲よくした方が楽しいのに」。高校生の、このあまりにストレートで素朴な言葉に、ハツとして絶句してしまった。いじめ問題というものを考えるべく頭のなかに、こんな発想そのものがなかった。そしてそのあと、まさにその通りだと納得した。

いじめへの対策を考えていくときには、いじめという行為が悪い行為であるということを頭で理解し、いじめたくなる衝動（からだ・無意識）をいかにして頭（意識）で抑えるか、という方向で発想していきがちだ。悪いか悪くないか、で考え、楽しいか楽しくないか、で発想しない。「悪いことをさせない」と発想し、「もつと楽しいことをする」とは発想しない。悪いことをしがちなからだを、頭で支配し抑圧することを教える。その発想の延長線上では、「いじめ開放対策」を打てば打つほど、悪循環を生むばかりだろう。いじめには、あたま（意識）に支配されて抑圧されたからだ（無意識）のストレスの発散という側面があるからだ。

### どれだけ深い喜びを楽しめるか

いじめる「楽しさ」、人をあざけり笑い支配する「楽しさ」。「むかつき」をいじめによってスカッとさせる「楽しさ」喜び。それに対して、仲よくする楽しさ、つながり共感し合う楽しさ。いじめるよりも、もつと深くて後味のよい喜び。からだを感じるとる喜び、楽しさの質こそが問われている。自分のからだの喜び方が問われている。どれだけ深い喜びを楽しめるか。どれだけ無意識（からだ）の深いところから喜びを汲み上げることができるか。

それにしても、いじめることが楽しい、と感じてしまうからだだが、日本ではすでにできてしまっているとすれば、そのうえで、どうすればいいのか。いまの子どもに、楽しいことをしてよい、というならば、いじめにかける歯止めがなくなる。やはり、理性的に善悪を判断して、いじめたくなるような自分の気持ちを抑えることを教えなくてはいけない、とこのように問われもするだろう。繰り返すことになるけれど、この発想を転換しないと、結局は、「いじめ問題対策指導」の悪循環が切れないのだと思う。

小さい子どものときから、苦しくてがまんして何かをしたときには、よくがんばったと褒められる。楽しく

て心地がいいから何かをしたときには、好きでやっつてただけでしょ、遊んでるだけでしょ、と特に賞賛されることはない。そのうちに、楽しいことをしていると、何か後ろめたい気になる。いやなことでもがまんしてするのがいいことだと、慣らされる。そうして、「楽しいことⅡよくないこと」「いいことⅡいやなこと」という図式ができあがる。それを「楽しいことは、いいことだ。いいことは、楽しいことだ」と反転させる。

自分を振り返れば身に覚えがあるように、楽しさには、後味の悪い「楽しさ」と、後味もよい楽しさというのがある。その後味を心の深いところで感じさせる力。人をおとしめる表層的な「面白さ」のあとに、より深いところから「さびしさ」が訪れる人間のからだの、無意識の力を信じたい。だれでもきつともっているその力の源泉を頼みたい。「無意識即から溢れるものでなければ、多く無力か詐欺である」と賢治も言う（「綱要」）。そこから溢れでる力にノルとき、深い喜びが湧いて心の底から楽しめる。心の底からの喜びこそが、はじめを超えることができる。それ以外の超え方は、はじめを抑え込んだにすぎない。それではきつと、いつかまた、あるいは違った仕方では、場合によっては、もっと破壊的な仕方では、

はじめが噴き出すだろう。

「むかつき」がムラムラと湧き、ストレスが溜まっているのは、無意識のなかでもその表層部分、意識と無意識の境目、意識でいつも抑圧されているコンプレックスの渦巻く個人的無意識のレベルにある。一時的に「いじめてスカツとする」のは、このレベルの解放だと考えられる。そのレベルを突き抜けた深層の無意識に、「いのちとつながる喜び」が溢れ出る後味もいい心の底からの楽しさの源泉がある。このあたりの心の動きは、ホリスティックな心理学がうまく説明してくれるので、少し見とおきたい。

### ホリスティック心理学の自我とへセルフ

ユング心理学やサイコシンセシス、トランスパーソナル心理学など、ホリスティックな心理学と呼ばれているものに、(図1)のような心のモデルがある。もちろんこれは仮説にすぎないが、このイメージにしたがって考えてみると、心がむかつかついたりワクワクしたりする動きが(ある程度まで)見えやすくなり、助けられることが多い。

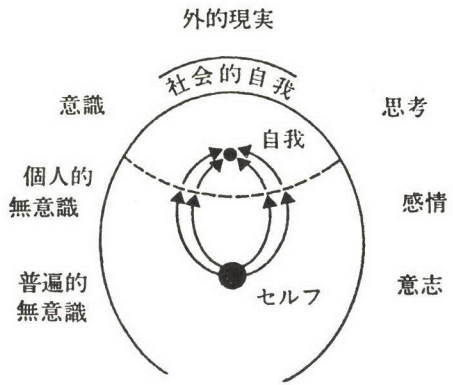


図1 喜びの源=<セルフ>

心がワクワクしてきて、心の底から喜びがわき起こってくる時がある。それをやりはじめると、心も身体もイキイキしてくるし、それは後味もよくてあまり疲れない。そんな心の底からのワクワクイキイキの源が、図の心の深いところにある「自己」、大文字の「Self・セルフ」だと考えてみる。

それに対し、自分がやることを、意識的に頭で、思考で判断して行動することもある。そうした方が、そうしないよりも有利であるとか、ほめられるとか、世間がも

っている「べし・べからず」に合うとか、分別をはたらかせてやるべきことを決める。これが「自己・ego」のはたらきだと考えてみる。

「自己」は、社会に適応するために必要なものであり、社会的要請や世間の目、親や教師のもっている「いい子像」に合わせる、外的社会との接点に社会的自我（仮面・ペルソナとも呼ばれる）を発達させていく。それは、生まれた時からあるものではなく、外的社会からの課題に、自分がそうしたいかしたくないかという自分の意志に関わらず、応対していくなかで形成されていく。とくに日本の場合には、いわゆるエゴイズムのエゴとしての自我というよりも、「こう見られたい私」「こう見せたい私」をつくりあげていくために、この自我のコントロールを用いているところが大きいように思われる。学校のように、たえず外からの評価の目を意識せざるをえないところでは、なおさらのことだ。

生まれてすぐには、図の点線より上の自我の領域はまったく形成されていない。自我と「セルフ」の区別、境目はなく、赤ちゃんはとにかく、自分が欲することを時と場に関わらず身体中で表現し、おっぱいが欲しいときには夜中でも泣き、ダッコを求め、いろんなものに次か



ら次へと興味を示し、考えるよりも先にそれに触わり口に入れる。まさに身体中、生きる意志のかたまり、といった風である。「疲れを知らない子ども」という表現があるように、やりたいことを次々と見つけては即座に行動する（遊ぶ）幼子は、それに付き合う大人が疲れるほどにエネルギーに満ちていて、イキイキとしている。

それが、次第に、自分のしたいことが他者の壁にぶつかって抑えられ、あるいは自分の意志（意欲）が出る前に先回りして外から与えられる課題をこなさなければならなくなってくると、自我の領域が生まれてくる。自我と「セルフ」の間に距離ができ、境界が生まれてくる。その間にフィルターのような膜ができる。このこと自体は問題ではなくむしろ、最低限の自己コントロールのために必要なことであろうが、それがあまりに早すぎたり、意に反して外から迫られる課題が過剰になると、その膜が硬く分厚くなり、「セルフ」からのエネルギーを受け取れなくなる。そして、イキイキを失って、いつもイライラしてくるようになる。

### 断ち切られた自我とセルフの間で

その状態が、（図2）のような状態である。自我はたえず、外からの課題や視線に対応することに追われ、自分の内部からわき上がるエネルギーに目を向ける余裕がなくなる。あるいは、内からの湧き上がるものを、知らず知らずに抑え込み抑圧することをおぼえる。そして、意識と無意識の間、無意識の比較的浅い層に、コンプレックスと呼ばれるモヤモヤやイライラのような否定的な感情をため込むようになる。

ムカツクといういじめにつながる感情は、この抑圧されたコンプレックスが刺激されてムカムカと動き出す状態だと理解することができそうだ。どんなときにムカム

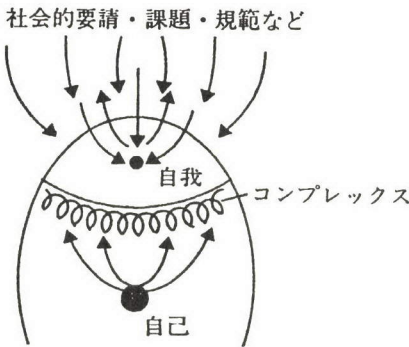


図2 喜びのわからない状態

かと動き出すだろうか。まず、自分がそうあつてはならない、と抑圧してきた〈セルフ〉からのエネルギーが、自我の下のフィルターにたまってきたとき、そしてそれが、自分が従っている社会的評価基準からすれば、そうあつてはならないはずなのに、その一般的基準から外れて生きている比較対象（変わった子、のろい子、自分勝手な子など）に会つて刺激されたとき、こんなときにムクムク・イライラと動き出す。しかし、このムクムクの中身を認めることは、これまでは無理を重ねて追従してきた社会基準と自分の生き様を否定することになる。そのように生きることがもし許されるなら、自分もそう生きたかった。自分ががまんして抑圧してきたものはどうしてくれるのか。と、〈生きたれなかつたもう一人の私〉がざわめきはじめる。しかし今更その声に耳を傾けることは、今までの自分を否定することになる。だから、その比較対象になる子を否定する。その対象を比較の相手として認めることはできない。許すことはできない。それがいじめという形をとることがあるのではないか。

いじめる理由としてよく挙げられる、「あの子は変だから」というのは、自分の基準にしてきた一般的な基準か

ら（上下左右は問はず）はみ出ししているからであり、いじめを正義だと正当化することが多いのも、相手にこの基準の厳しさを悟らせて、自分の間違いを悟らせ、自分たちと同じかたちでの「社会適応」に導いてやるのだ、と考えるから。教師の側からの「いじめられる子にも問題がある」という指摘が絶えないのも、こうしてみればよくわかる。学校の価値空間において一般化されている（教師が一般化しようとしてきた）自我が従うべき基準からみれば、「変な子」がいじめられる構造になっているからである。

### 〈セルフ〉とのつながる楽しみの方へ

とすれば、結局は、一人ひとり、自分のセルフからの声に耳を傾け、そのエネルギーにのってイキイキと生きることが、いじめへの根本的な対処法になるのだと思う。いじめたりいじめられたりすることがあると、何か心からイキイキするような喜びが、ここには欠けてきているのだな、もつと楽しめる場をつくっていかうと発想する。していいことと悪いことの基準が教育できていないから、その善悪の基準を植え付けようと発想するので



はなく。「北風と太陽」のメタファーのように。イライラを鎮めるには、イライラと向き合ってイライラを抑えようとイライラするのではなく、発想を切り替えて、楽しいことを始めてみる方が早い。先生がイライラして、強面で目を光らせ正義感を振りかざしていじめ対策に駆け回るのは、まさにコートを脱がそうと北風ビュービューしているようなものではないか。

それよりも、先生がまず、こんなに自分が楽しくイキイキと生きている、ということをや、ゆったりとした存在感でもって、生徒たちに示せたらいいだろうな、と思う。みんな楽しく生きていいんだよ、と。ちよつとこだわるとしたら、その楽しみが、どれだけ心から喜べる楽しさなのか、どれだけセルフとつながった楽しさなのか、という点だろうけど、まずは基本的に「楽しいことはいいことだ」と発想できるようにしたい。そのうえで、楽しさや喜びの質を問うていきたい。

と言われても、今さら何をしたら自分がイキイキするのか、わからない。セルフからの声など、長らく聞いていない。ほどほどに面白いことはあっても、心の底から楽しいことなど、忘れてしまった……。それにしても、それでも信頼できると思うのは、セルフの方は、たとえ

聞きとめてくれなくても、たえず今も呼びかけ続けてくれていることだ。学生たちには、ラジオのチューニングのたとえ話がわかりやすいと評判だ。ラジオの電波は、その周波数にチューニングして聞いていないときでも、いつでも届いてきている。でも、こちらがチューニングしないと聞くととれない。いつも課題に追われて忙しく、耳を澄ませて少しづつゆっくりとチューニングしていく余裕のないときは、聞こえない。いちど立ち止まり、ゆっくりとして、時間をかけて自分のこころのなかの声に、少しづつ少しずつ耳を傾けていく時間を、これは意識的に主体的に作り出してみる。あるいは何かをするにしても、それをしながら、これは自分の心のどんな声にしたがってしているのか、自分に聞いてみる。そんなことを繰り返すうちに、はじめは聞きたくない声が聞こえてくることも多くて、イヤになってしまう、止めてしまいたくなくとも多いけど、それでも続けていくうちに、ピタッと周波が合うことがある。合った瞬間は、その瞬間にわかる。何か予感のようなものがして、ドキドキしてきて体が震えたり熱くなるような……。でも、一度に、一足飛びに、そんな瞬間を求めるよりも、「マインドフルネス」とテイク・ナット・ハンと呼んだけれど、心ここに

あらずではなく、「今ここ」での一つひとつの自分のしていることに心を込めていく、していること・感じていくことを味わっていく、つていうことを、先を急がずにしていくと、隔てられた自我とセルフがコミュニケーションをはじめの感じがつかめてくるようにも思う。いつもセルフの声を聞いているわけではなく、聞いていない状態に気づけるようになって、心を静め、心を込めてチューニングしていく感じがつかめてくるように思う。そうすると、必要以上に「しなければならぬこと」に追われることが少なくなつて、「楽しみながらできる」ことが増えてくるようにも思う。

### 悲観ゆえの楽観

まとまりがつかなくなつてきたけれど、最後に付け加えておきたいのは、人間のセルフや無意識に従えば、「仲良くした方が楽しい」式の喜びがあふれ出てくるというの、あまりにノーテンキな楽観的な人間観ではないか、という疑問だ。もつともだと思ふ。歴史を振り返つても弱者への残虐性や差別抑圧に人類史は満ちている。人間の無意識や欲望が、悪魔的な魔性も持ち合わせ

ていることを、知らないわけではない。むしろそれらの中に実感するからこそ、その力を抑えきれぬものではないと思ふ。外的な規範による理性的なコントロールによつて、制御できるものでもないように思ふ。いや、ある程度までは抑制できるのだろうが、結局そのようなコントロールが強者の論理を合理化するのに使われてしまふように思ふ。魔女狩りによつて、その自らの内なる魔性から解放されるものではない。むしろそれは強化されてしまふ。他方で同時に、「仲良くした方が楽しい」と感じる、無意識の共感性も、私たちは持ち合わせている。メキシコの人たちが、正義の規範よりも、こちらを頼ろうとするのは、楽観的な人間観ゆえであるよりも、被征服時以来、正義やヒューマニズムの名のもとに彼地を蹂躪した悲劇の数々を体験した絶望の極からつかみ取られた賭けのようなものであるように思ふ。詳しくは語れないけど（たとえばオクタビオ・パスの『孤独の迷宮』を参照）メキシコの楽天的な明るさは、漂白された明るさではなく、深い陰影を落とす明るさで、背後の闇と表裏のものであるように思ふ。なぜ彼らは、あれほど「シンパティコ」（響き合う心、共感する心）を強調するのか。なぜ陽気に陽気に、と、北風ではなく太陽を求め

るのか。それは単なるノーテンキな楽観主義ではない、と思う。

無意識のセルフのエネルギーのなかに、「シンパティ」と「魔性」は、たしかに両方存在する。うまく言えないけれど、両極的な力として。両極的というのは、二つの対立する別々のものとしてではなく、一つのものの二つのダイナミズムとしてあるようなものである。方向性を失った混沌と、混沌に流れを与える方向性のように、一つのエネルギーの二つの局面のようなものだと感じる。抑圧されたセルフのなかに渦巻くエネルギー。それを絡み合った混沌としたコンプレックスのまま暴発させるのではなく、そのエネルギーを解きほぐしながら方向づけていくセルフと自我の間の水路を、凝固しがちなフィルターとの編み目のなかに切開していくこと。

まずは、心の底から喜べた、自らの体験のなかにある忘れられがちな身体の記憶に身を沈めてみたい。そこでは世界や他者と響き合う喜びが、身体のなかからわき起こる。方向を見いだして、わき上がってくる。その、悶々と渦巻いていたエネルギーが、すじ道、水路、方向を見いだしてあふれ出してくる、あの力を呼び起こした。自我の理性的なコントロールが必要となるのは、そ

のエネルギーをうまく社会的に現実化していくときであって、その逆ではない。その逆、つまり、社会現実に適応していくためにセルフとの水路に蓋をするために必要なのではない。蓋をし続けると、押さえつけられ方向を失った混沌としたエネルギーが、とめどもなく暴発し、そう魔的に暴力的に爆発し、コントロールを失つてのみこまれてしまう。……大人社会も含めた時代現象としてのいじめの深層、個々人の無意識と社会集合的な無意識のなかに、行き場のないエネルギーが、暴発寸前のマグマのように蓄積されてきているのを感じる。いや、悲観的に締めくくるつもりはないのだけれど、そう、だからこそ、一人ひとりが深い喜びの源とのつながりを探り当てていく営みが、すぐれて社会的な意味をも持つ時代なのだと思う。

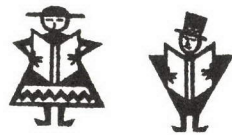
楽しみましょう。そしてその楽しみがちよつと違つていう後味が残つたら、もう少し深い楽しみを共に探してみよう。そうして、楽しみを深めていきましょう。

(以上、共編著『喜びはいじめを超える／ホリスティックとアドラーの合流』春秋社および「意志の源Ⅱ〈セルフ〉に根ざす」『児童心理』99年8月号』の拙稿に加筆して再構成。)



# P T Aなんていららない？

谷辺 葉



唐突ですが、最初に、一番宣伝したいことを書いてしましましょう。五月半ばに、「はじめてのP T A」(W A V E出版)という本が刊行されました。ぜひ、お求めください！私と友人たち三人との共著です。三十近い、P T Aの活動や人へのインタビュ―は、すべてこの本のために取材しました。——というわけですが、なあんて今ごろP T A?と思うでしょうね。P T Aなんてもういらないう声をよく聞くし、委員を引き受けようと手を挙げる人は少なくなっているし、それどころか面倒なことにはできるだけ関わりたくない、という気持ちが見え見えの人が増えているのだから。

発端は、P T A関連団体で広報を担当している執筆者の一人が、「ねえ、P T Aの本はどう?」と、持ちかけてきたことからだ。「なーんでP T A?」と、正直、私は思った。いい加減うんざり、金輪際やりたくないなんてない。恨みつらみはあるけどね。いい活動をするために言いたいことも、いーっぱいあるけどね。

でも、本の理由は、こうだった。「P T Aの委員になつてしまったのだが、何をしていいのかわからない。何かマニユアルのようなものはないだろうか」という問い合わせがとても多く、その団体で十何ページかの「P T A Q & A」という冊子を作ったら、これが毎年コンスタン

トに売れるのだそうだ。各委員会がどんな活動をするかなんて、「申し送り」なる縛りのような引き継ぎで、どのPTAも毎年同じ活動が伝えられていくのだと思つてた。もし、何かを変えたいならPTAの基本をしっかりと捉えて、案を出せばいい。基本ならPTA本のベストセラーとも言える『PTA歳時記』（永畑道子著）がある。これにはかなわない。——と思つたら、さにあらず。理念や考え方を書いた本では、もう、今の人たちには受けないんだそう。はっきり言えば、マニュアルとしてどうしたらいいのか書いてないと、理念から活動を導き出すことができないらしい。

マニュアル本だつたら売れるかもしれないね、つてなことで、友人がハウツー書を企画した。次は出版社探した。一社目を説き伏せ、OKを取り付けたものの、誰がまとめるのかはつきりしていなかったためとりかかりが遅くなり、出版社からはこのようなタイプの本は三カ月で作らなきゃ、と苦情が来た。企画した友人は編集者と喧嘩して、「やめるー」と宣言、引き払ってしまった。かっこいいけど、現実が厳しい。決して景気がいいとは言えないこのご時世、ほんとに売れる見込みのない本に出版社はおいそれとはOKしないのだ。本は、会社にとつ

ては商品なのだから。軽くて、ちよつとちよつとおいしい話が載っていて、あまり深く考えない、というのがいいらしい。でも、めげずに二社目。

「PTAの経験のある社員が、『PTAはお茶飲みしてるようなもので、そんなお母さんたちがPTAのマニュアルなど買わない』と申しまして。ですから、この企画はお断りしたいと……」という返事。

「そんなことはありません。真剣に考えている人たちはいますし、実際マニュアルの小冊子が売れているのですから……」と押しはしたけど、心の中では妙にうなずいていた。わかるよねえ、その光景。

でも、それはその人がいたPTAがたまたまそういう所だつたのだし、イメージのPTAでもある。たしかに、物事一つを決めるのにやたらと時間がかかる。議論とは言えない話し合いが果てしなく続く。それでも私のあしかけ十年のPTA活動経験では、お茶飲み委員会など、一度もなかった。みないつも真剣だったし、私はこれじゃいけない、とたいていは対案やら新方針やら提出してきた。だから、委員会ではトラブルが続出したものだ。新しい案を出すたびに「前例がない」という言葉が返ってくる。ちよつと、待つてよおー、と言いたかった。



前例があるってことは、その前例を誰かが作ったってことでしょうか？ じゃ、今またその前例を作っちゃ、なぜ、いけないの？ ほんとに、矛盾だらけ。

P T A会費の値上げ案が総会で出されたときなど、私は三十分も質問やら意見で粘ってしまった。委員を各クラス四人から二人にし、活動を簡素化するという案がその前に可決していた。簡素にすれば、今までの活動にかかっていた費用が削減される。ならば、今お金が足りないからといって月二〇〇円だったのを二五〇円に値上げする根拠はなくなる。ところが、みなさんお金持ちなのか、シラーっとした雰囲気。二三〇円のバス代が二五〇円になるだけでもぶつぶつ言う人が多いうの。しかも、子ども一人につき、払っているのだ。えーっ、P T A会費って、会員一人につきでしょう？ でも、「創立記念日に子どもが紅白饅頭をもらうし、運動会にはノートをもらったりするから、子どもの数でいいんじゃないですか？」と言う人がいて、ギャフン！ その使い方を、検討しなきゃいけないんだよ。でも、そこまで言うのは、疲れた。「谷辺さんの個人的なご意見はよくわかりました。でも、もう四時過ぎていますので、これで終わりにしてください。私は帰りたいんです」という個人的な意見が出たと

きには、もうヘトヘト。私の話し方は、たとえば「私は、二五〇円にする根拠が知りたいんです」とか、「会費というのはいいけれど、子どもが三人だと三人分というのはいいけれど、子どもが三人だと三人分というのはいいけれど、子どもが三人だと三人分というのはいいけれど、私は反対です」など、「私」をいつもいれていた。決して相手を非難したり追及したりしない言い方のつもりだった。そして、この意見の責任の所在は私にあることを明確にしているのだが、それは個人的、なのかなあ？

「総会は、私たち一会員にとって、直接意見が言えるたった一つ場です。その場を、私たちは大事にしなければいけないんじゃないでしょうか？」と、最後に「私たち」として述べた。そして、前の方の五、六人から盛大な拍手があつて、私はほっと救われた。

この総会を含めて、P T Aの活動で最初にやらなければならぬこと、それは「話し方教室」であると、私はつくづく思うのだ。でも、この本にはそれは書いていません。

友人がこのP T Aの本から降りたため、まとめ役を私が引き受けた。ついだから、内容も私好みを提案した。取材をメインにすることだ。初歩的なハウツーだけでは、買う層に限りがある。ハウツーを入れて、少し活動して

疑問に思った人も取り込めるような本。やり方も入れたユニークな活動の紹介で、しかも、読み物としても面白い。これなら、きつと広い層を取り込めるぞ。

着想はよかつたけど、いやあ、書いてみると紙面の都合でほんのわずかしか書けず、しんどかつた。でも、私自身にとつては、今までの活動を整理することになつたし、実際ユニークな活動をしているPTAや、先生方とより協力的な関係にあるPTAが、すぐ身近にたくさんあることを知つた。常々、学校は私たちの生活の中にあるもので、決して象牙の塔であつてはならないと思つていたけど、地域と密接な関係を築いて学校との橋渡しをしているPTAが少なからずある。

そしてまた、委員を避けるだけでなく人との関わりも避けたいというように、大人がバラバラになつてきていて、それはそっくり子どもの世界に見えている。子どもが問題だつて言われているけど、実は、大人が、問題なんです。でも、そんな大人たちだつて、バラバラでいいはずないよね。一人でできることなんて、限られている。やつぱり、協力の力、つてあると思う。三人寄れば文殊の知恵よ。雀の涙、焼け石に水、ゴマメの歯ざしりかもしれないけど、運営の仕方によつてはPTAはいい力が出る。

こゝんなにも多くの父母がPTAに関わり、ものを言い、改善しようとしている。誰もがよりよいPTAや、教育を考えるPTAに立ち戻ろうと努力している。日本の各地にそんなPTAがある。まだまだPTAの役割は終わつてないんですね。今、これを読んでいるあなたも、そう思うでしょ？この本の活用法の一例としては、委員会などで案を説明し、説得するときに「この案に近いことをもうすでにやっているPTAがあります」という証明やデータとして見せてください。強い味方になります。では、さつそく書店でお求めを！

#### ◆出版記念シンポジウム

### 親が元気になるために

子ども・教育・いじめ・PTAを語り合おう

97年6月22日(日)

午後1時30分～4時30分

会場・渋谷勤労福祉会館/第1洋室

(渋谷駅下車徒歩10分)

公園通りバルコPart2斜め向かい)

#### ◆パネリスト◆

久田邦明(神奈川大学講師)

小島希里(翻訳家)

三宅初穂(都P連)

谷辺 葉(Pネットワーク)

Pネットワーク・フェミックス共催

◆お申込・お問い合わせは

☎03-3424-3603

# 「多様性」の困難をめぐる

堀田 碧

## 「多様性」はやさしいか

前号では、イギリスでの黒人フェミニズムとの出会いについて、書いた。それは、私にとって、実は「西洋」「白人」「中産階級」「異性愛」フェミニズムであったものを「普遍的な」「本当の」フェミニズムと思いつたこととの呪縛からの解放であり、「フェミニズムはひとつではない」「フェミニズムは多様なもの」という、「新しいフェミニズム」の野への、わくわくするような踏みこみだった。

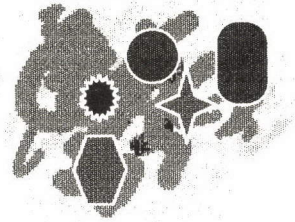
ところが、これで万々歳かというところではないの

だった。「多様性」は、危険なイバラの野への道しるべでもある。

## 「多様性」はきびしい

最近、感じるのだけれど、どうも「多様性」とか「違い」とかは、いまの日本で、ある意味ではむしろ「売り」になってきているのではないだろうか。

気がつくとき、みんなが「違うことってすばらしい」とかなんとか、言っているような気がする。そこには、大ざっぱにいつてふたつの傾向があり、ひとつは、「みんなで仲良く」的な、かたちばかりの「多様性」の賛美、





ふたつめは、思想のトレンドとしての「差異」や「多様性」の——ときとして、なにがなんだかさっぱりわからないような専門用語の羅列による——称賛。

もちろん、「横並び指向」「異者排除指向」のつよい日本社会でのメインストリームは、依然として、「多様性」を認めない傾向にあるのだけれども、他方で、そうであればあるほど、こうした「既存の」傾向にたいして、「多様性の尊重」を叫ぶ一見「リベラル」な傾向もめだってきた。それはたぶん、悪いことじゃない。いや、当然、「いいこと」なのだ。

でも、ちよつと待って。

私はそこに、すごい「あやうさ」を感じてしまう。

なぜなら、「多様であること」は「やさしい」ことじゃない。違ったもの同士がふれあえば、傷もつく。血もながれる。それはむしろ、とても「きびしい」ことなのだ。

それが、「フェミニズムはひとつ」から「多様なフェミニズム」への変化の過程で実際に起こったことだった。

「フェミニズムがひとつ」であった頃、「女だからわかりあえるのよね」と言っていた頃には、少なくとも、その「女の部屋」にいた人たちにとっては、「仲間」意識があり、心を許せる語らいのひとときがあった。そこに

いたのは「同じような」女たちばかりだったから、「女」という名で「自分たち」の問題を語っても、だれも文句を言わなかった。でも、その「女の部屋」には入れなかった女たちがいて、抗議の声が上がり、その結果、ようやく「多様な」女たちが入ってきた。

すると、そこにはもう、なれあいたな「仲間」意識は許されなくなる。「女だから……」と言えば、「どういう女？」と声が飛ぶし、「多様な」女たちのあいだには、緊張関係が生じたり、ときには喧嘩だつて起る。部屋のなかでは、むかしのよう「みんながひとつ」ではないから、「同じような」女たちが集まってそれぞれ別個のグループをつくりはじめる。みんながこんなバラバラじゃ「女の部屋」なんか意味がない、という声がある……。

これが、「多様性」と言うことなのだ。  
「多様性」を尊重する、ということとは、こうした「楽しくない」ことを引き受ける、ということなのだ。引き受けて、それでもなんとかしてゆこう、という覚悟なのだ。そういう覚悟で引き受けたとき、はじめて、「多様性」はすばらしい果実を实らせる。

イギリスで女性学を学んだとき、必修の「女性、人種、文化」の講義で、黒人講師のデリアは、いつものように



クールな口調で、「女性運動の分裂」について語ったのだったが、それが、やはり痛ましい過程であったことを、私はのちに、何人かのフェミニストの書いた本などで知るようになった。アメリカでもイギリスでも、「多様なフェミニズム」は——とりわけその初期には——とまどいと痛みと分裂を伴った。

ところで、こうしたことを知ったとき、私のあたまたまに浮かんだのは、「それってどこにもあることじゃない?」ということだった。同じようなことは日本でも起こったし、たぶん、いまも現に起こっている。

しかも、フェミニズムに限らず、「差別」を問題にする実践活動では、こうした「痛ましい」分裂はつねに起りうる。

それでも、痛みのないところに本当の成果もないだろうし、自分は安全地帯に立ったままでの、きれいごとの「同情」や「正義」にはうんざりしている以上、衝突や分裂もむだではないと思うけれど、それも、そうしたことを前向きに乗り越えて、はじめて言えることだ。「痛み」のままに終わってしまったのは、つらい。そして、残念だけれど、そんな例を、たくさん見てきた。

だから、それを、「アイデンティティ・ポリテックス」

つまり「アイデンティティの政治」と呼ぶのだと、イギリスの女性学で知ったときは、とても感動した。

「多様性」のきびしさを乗り越えて、「多様性はすばらしい」と言うためには、実際の痛ましい体験を通してうかがいがつてきた、この「アイデンティティの政治」について、理解しておくことがぜひとも必要だ。いま、この日本の地で、強くそう思う。

### アイデンティティの政治とは

まず、「アイデンティティ・ポリテックス／アイデンティティの政治」という言葉自体は、アメリカやイギリスでは、たとえば社会学などでも、すでに一般用語化している。それは、とりもなおさず、そうした現象が存在し、それをめぐって葛藤があり、そうした葛藤を解決しようとする意志が存在してきたことを意味している。そして、その葛藤は主に、「性」と「人種」をめぐってくり広げられたのだった。

一九六〇年代後半から七〇年代にかけての、いわゆる「第二波フェミニズム」が、「個人的なことは政治的である」と言ったとき、それは、直接的には、たとえばレイプや家庭内暴力といった「性の政治」を意味したものだ

った。しかし、それは同時に、あらゆる「個人のあり方」を「政治」化する宣言ともなった。

以来、中立的で一般的な「個人」などというものは許されなくなり、その個人は「女性」であるのか「男性」であるのか、「黒人」であるのか「白人」であるのか、「労働者階級」であるのか「中産階級」であるのか、といったことが、問題にされることになる。それは——当時の女性解放運動や黒人解放運動のあり方にも規定されて——当然のように、「男性」と「女性」のあいだ、あるいは「白人」と「黒人」のあいだの「権力関係」を問題にすることを含んでいた。

これが、「アイデンティティの政治」である。

つまり、「アイデンティティの政治」とは、「男性」とか「女性」とか「黒人」とか「白人」といった、「共通の体験」や「アイデンティティ」を重視する政治のことである。それは、「違った」「多様な」体験やアイデンティティをもった者が集まったとき、そしてその「違い」を尊重しようとするとき、起こってくる。

これは、「違い」を——権力をもった者が——「異質」として認めない、ということに比べれば、「一歩前進」に違いない。さらに、ある「アイデンティティ」を宣言すること

は——とりわけ、その「アイデンティティ」に属すること  
が「良くないこと」「劣っていること」であるかのような偏見が支配的であるような社会においては——偏見をはねのけて、自分に誇りをもつことであり、「自己解放」への重要なステップ、変革へのエネルギー源、ともなる。

たとえば、一九八〇年代前半に、「コンバヒー川コレクティブ」というアメリカの黒人フェミニストのグループが出した『黒人フェミニスト宣言』という文書がある。そこで彼女たちは、「黒人」「女性」「レズビアン」「貧困者」という「アイデンティティ」を宣言して、「人種」「性」「性的指向」「階級」による抑圧——それらはたがいに関連しあっている、とも指摘している——と闘うことを「アイデンティティの政治の一部」と言っただけでも、これは、「アイデンティティの政治」のすばらしい例だろう。

では、どうしてそれが、「イバラの道」へ通じるのか。

### 「アイデンティティの政治」の「落とし穴」

まず、「アイデンティティ」が極端に強調されて、「自分(たち)の体験こそが絶対に重要なものだ」という主張になってしまう「落とし穴」があることだ。それは、

さらにつきつめられると、「あるアイデンティティに属することが、その個人に倫理的な正当性を与え、それに属さない個人はそれだけで問題がある」かのような主張になってしまふ。「体験していない人にはわからない」「あなたに○○の気持ちが変わるのか」といったせりふは（そうしたせりふが口にされる必然性があることが多いのだが）、それ以上の討論を拒む。これは「アイデンティティの政治」の不幸な面といえる。

さらには、「アイデンティティ」間の「優劣」、あるいは「差別・抑圧」の序列化、という考えが生まれてしまふことだ。

たとえば、アリス・ウォーカーが『カラー・パール』を発表したとき、「黒人運動に分裂をもちこむ」と非難されたが、これは、「黒人」という「アイデンティティ」と「女性」という「アイデンティティ」の「優劣」を比べる考え方であり、「人種」と「性」の抑圧を「どっちが重いか？」と「序列化」する考え方だった。これもまた、「アイデンティティの政治」の不毛な結果である。

こうした「アイデンティティの政治」の不毛な展開は、ときとして、混乱と相互不信と分裂に、ゆきついてしまふ。

あるアメリカ人フェミニニストが書いている例――。

「ある集会で、ひとりの女性が立って言った。『私は白人で中産階級のフェミニニストです』。次の女性が立って言った。『私は白人で中産階級で専門職でレスピアンです』。つぎの女性が立ち、『白人でシングルマザーで体に障害はなく……』」

これはたぶん戯画化されてはいるが、たしかに「アイデンティティ」は、ある意味では、無限に細分化される。そして、どんどん細分化されると、まるで迷路に入ってしまったようにわけがわからなくなり、ついには「アイデンティティ」そのものが無意味化する。そして、細分化される「アイデンティティ」の、いつたいどこまでを「宣言」すれば十分なのか、だれにも決められなくなってしまう。

また、「体験していないことはわからない」のだから「他人の問題には発言できない」としたら、みんなが「自分のこと」だけを、べつべつに、やるしかなくなる。それは、分裂主義と、互いへの無関心を生む。

「アイデンティティ」は一枚岩ではない

こうして、はじめはすばらしいものに見えた「アイデンティティの政治」は、たいへんな危険をはらんでいる



ことがわかる。

これはジレンマである。しかも、避けられないジレンマなのだ。

どうしたらいいか。

はつきり言って、良い答えはない。というより、「多様性」は必ず——多かれ少なかれ——「アイデンティティの政治」の、よい点も悪い点も、伴うものなのだから。でも、無防備につっこんでしまうのと、こういう「問題」があると予測しているのでは違うのではないか。

「ああ、これは『アイデンティティの政治』だな」と思えば、ほんの少しだけけれど、ゆとりができて、打つ「手」も考えられる。

そして、いま、「答えはない」と言ったけれども、「アイデンティティの政治」の不毛なところを乗り越えて「多様性」を豊かに実らせる鍵は、「アイデンティティ」という概念そのものをめぐるこのかんの議論のなかで、提出されつつあるように思う。というのは、「アイデンティティの政治」が不毛化するとき、そこには「アイデンティティ」というものを、単一で、一枚岩的で、固定的なもの、として捉える考え方があからだ。

ここで当然、そもそも「アイデンティティ」とはなに

か、という疑問が出てくる。(ちなみに辞書をひくと、「同一性」「自己同一性」「主体性」などと書かれていて、ますますわからなくなる。)

残念ながら、ここでは「アイデンティティ」そのものについて詳しく論じるスペースがないので、結論的なことしか言えないのだけれども、まず、「アイデンティティ」を一言でいうなら、「自分とはなにものであるのか」という認識だ。ところが近年、この『自分』『なにもの』という領域は、既存の価値観の崩壊とあいまって、ひどく動揺がめだつ。それにつれて、「アイデンティティ」という語も、近年、かなり注目をあび、また複雑な様相も呈してきている。そして、私の考えでは、これは、西洋の歴史とそのなかでつちかわれてきた思想や学問の体系と密接に関連した言語であり概念であって、さまざまの意味で、日本人にはかなりやっかいな概念だと思う。

そういうことをふまえたうえで、結論的に言えば、「アイデンティティ」とは、「私のアイデンティティは○○である」と簡単に言えるようなものではない、ということだ。「自分とはなにものか」ということへの答えは、ひとつおりではない。「女性である」とか「日本人である」とか「○○として働いている」といったことも「なにもの



か」の内容なら、「何歳」「どこに住んでいる」「○○教を信じている」「車椅子を使っている」といったことも、やはり内容を構成している。つまり、「アイデンティティ」はひとつではなく、多様なのである。しかも、この多様な「なにか」は、時、所（時間と空間）によって変形しながら、密接不可分からみあつて、「自分」を形成している。さらに、例えば「女性である」ことの中身もまた、一律ではなく、おそらくはふたつと同じものがないと言えるほど、個々人で違っているし、あるいは、「自分」を通して、違って認識される。

「アイデンティティ」を、こんなにも「多様」で「重層構造」で「相互連関的」であり、かつ「変動的」で「主観的」なものと考えたと、「○○としての体験」「○○というアイデンティティ」を絶対視するような「アイデンティティの政治」の「落とし穴」にはまることはなくなる。もともと一律でない「アイデンティティ」間の「優劣」を比べることなどできるわけがないことも、明白となる。

ところが、ここで困ったことが起きる。

こうした「アイデンティティ」概念は、「アイデンティティの政治」のもつ「自己解放」的な面をも、葬りさ

つてしまいかねない、という問題だ。「アイデンティティ」が、単一で固定的でなく、多様で変動的なら、例えば「女性として」「黒人として」というように自己の「アイデンティティ」を「宣言」できるのか、という疑問が、当然でてくるからである。

はつきり言つて、これはとてもむずかしい問題だ。

事実、そういう論理に立つて、『女性として』と言うことはできない』『女性』でくくるのは意味がない』という主張もこのかん現れ、けっこう力を持ってきている。でも、私は、そうではないと思つている。

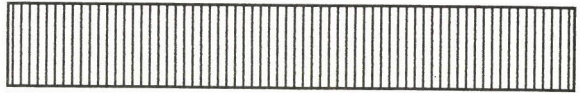
「アイデンティティ」が多様であり、「女性」が多様であるということは、「女性」という「アイデンティティ」の「宣言」もまた、多様になされうることだ。そして、社会や個人の状況によつて、そうした「宣言」は依然として、重要な意味を持ちうるし、現に持つている。それを、一律に「意味がない」とするのは、むしろ、特定の社会や個人の状況を前提にした、ときとして傲慢な、決めつけになるのではないか。

こうして、「多様性」の立場に立つことは、どこまでも開かれた議論をつづけることでもある。つまり、たいへんに「疲れる」ことなのだ。

(つづく)

# フェンスを超えて

小平陽一



一年生の担任になった。今年、車イスの生徒が入学してきた。こんな生徒と付き合えるチャンスは滅多にない。そう思って、その子の担任を希望した。そして、ありがたいことに留年した生徒も同じクラスに入ってきた。

いろんな子がクラスにいる。他の生

徒のそれぞれだあって、きつといろいろな個性の持ち主だ。こないいいことはない。そしてもう一人、素晴らしいゲストがいる。毎日毎時間、介護のため車イスの子の隣に座る彼のお母さんだ。

新入生たちはまだ緊張している。この時期、どの顔もあどけなく本当に初々しい。だけど、それはほんの束の間。入学式に、膝まであったスカートの丈が、3日ほどで一〇センチ、一週間で二〇センチ、と短くなり、スクールソックスがルーズソックスに変わってゆく。それとともに、日増しに緊張の糸がとけ、高校生活に馴染んでゆく。

クラスの女子生徒が、ガムテープを借りにきた。名前シールを体育着に貼って来るのを忘れたと言う。ガムテープという発想はちよつとねえ。だから被服室のアイロンを貸してやった。

しばらくして、「先生、できないんですー」と言ってきた。なに！と被服室に行くと、彼女のジャージの胸には名札はなく、アイロンの形だけがそっくり残っていた。そばには、焦げたシールがころがっていた。

名前シールは、保護シートをはがして、アイロンを軽く当てれば熱で貼りつく。保護シートを彼女は知らなかった。でも、あて布とか、化繊が高温に弱いとかさえ知っていたら…、生活技術がどんどん失われてんだねー。

「先生、このアイロンの跡取れないんですか？」「ん！君が失敗して、一つ賢くなった立派な勲章だよ」

(こだいら・よういち)

風がかわる  
匂いがかわる

家庭科をやめたくなる時

私は今、東京都練馬区の中学校に勤務しています。

Weでは、高校の話が多いのですが、中学校の話も聞いて下さい。私が中学生だった頃（はや二十数年前ですが）、女子は家庭科のみでした。それが私にとっては非常にくやしくて、家庭科を嫌いにさせた大きな要因だったと思います。

私が教員になった十五年前は、一年生のみの共修でした。時間数は、一・二年生が週二時間、三年生が三時間、時間数は今も変わりません（三年生二時間という学校も多いが）。女子のみというのにとっても抵抗があったので、

何かを感じてほしくって

………  
藤原裕子

私は早々に全学年共修としました。男女いっしょ、これだけでも喜ぶべきことなのですが、そのぶん、家庭科の時間数は半分が減り、担当する人数は倍になったのです。昨年場合は、時間は一・二年生週一時間、三年生週一・五時間、クラス数は十三クラス、生徒数は約五百人でした（名前と顔が一致する前にさよならした生徒さん、ごめん下さい）。調理実習で二時間続きたいときは、技術と隔週にします。すると、「さて、今日やった授業を実習する日は一カ月後ですね」、そして実習当日、「今日って何作るんだっけ？」（苦笑）。

それに加えて、一年生で取り組む領域が「家庭生活」



というもので、主婦としての私にストレスを引き起こさせる代物なのです。衣食住、それぞれに事細かくて……

例①家の中のものよこれを調べて、それに合う洗剤や用具、そうじの仕方を考え、実際にやってきてね（自分の部屋だつてしないのにな）。

例②あなたが所持している衣類の分類と数を調べて、リストを作りましょう（こんなことやってますか？ 私はやってません）。

一度読んでみて下さいよ、主婦雑誌のような内容を（きつとタメになりますよお）。

自分がやってないこと、やりたくないことをどうして人に教えられる？ 家計簿だつてろくにつけていない私は、主婦失格？ そして家庭科の先生としては落ちこぼれ？

それでも、やめない、その理由は？

こんな私でも、今が旬といえる領域があります。毎年三年生で取り組んでいる「保育」です。八歳の娘とまもなく二歳になる息子の妊娠、出産育児を通して、母として見えてきたものや新しく結びついた人達との交流から、若い世代に伝えたいものがあります。「妊娠もつらい、出産は死ぬような痛みを耐え、まさに命がけで産む。

産んだ後もまた大変。こんな大変な思いをしても人はやはり子を産み育てる。だから自分を大切にそして他人も大切にしてほしい。私自身、子供を産んでからは、どの子を見ても、よくぞここまで無事に育ってくれたものと感激してしまうのです（ずい分涙もろくなったのは年のせいかもしれません）。

まずは自分を知ること

教科書の最初のページは「わたしってだれ？」と出ています。そこで私は「あなたはだれですか？」と一人ひとり聞いて回ることにしました。みんなキョトンとしています。

「人間」「地球人」「男」「お父さんの娘」「受験生」「私は私」等、哲学的な答えが多くてその人が見えません。次はクラスによって変えて、お見合いの相手とか新しい友達とか面接官になったつもりで相手に何を聞きたいか質問してみました。「どんな日が好きですか」「イヌとネコどちらが好きですか」「血液型は」「生年月日は」等、質問した本人の価値観みたいなものが浮かんできました。

次にWeでもいろいろと取り上げられている「男らしさ、女らしさ」についてちょっとゲーム感覚で取り組ん



で見ました。一人に二枚の紙を配り、男らしさ、女らしさについて無記名で書いてもらい、集めます。シャッフルして二枚ずつ配り直します。男らしさなのか女らしさなのかわかりません。そこで、もらった人がそれを読み上げて、黒板の男・女のグループの所にはっていきます。例えば、「クール」という項目を書いた人は男らしいととらえていても、もらった人が女らしい方にはってしまったりするわけです。それをクラスごとにイラスト（次ページ参照）にしてもらいました。

プリントして配ると、みんな興味津々です。「自分と全然ちがって、チョー悲しい」とか、「見えない部分は男も女も大切なものは同じかも」なんて感想もあつてドキッとします。

次に「自分ができるまで」というテーマです。

「成長の記録」を調べてこよう、という課題を出すのですが、生徒は自分がお腹の中にいたときのことや、出産の大変さをあまり聞いていないようなので、私の体験談を交えながら、百人生まれたら百様の出産ドラマがあるのだからしっかり聞いてくるように伝えます。

画用紙に、「名前の由来・妊娠出産のときのこと・幼

児期の写真かイラスト・そのエピソード」などをまとめて来て、クラスの後ろに掲示します（いろいろな家庭の事情もあるので、写真や内容についてはできるだけいいからとっておきます）。ほとんどの生徒が〇歳〜四歳位の写真を大切に付けてくれます。どれもこれも本当にかわいくて、提出してもらおう時に交わす二言三言に、今までにない親しみの感情が生まれます。

#### 〈感想〉

「はじめてお母さんと、私が小さかったころの話をいっぱいして、驚いたことがたくさんあった」「他の人を見て、みんないろんな話、ドラマがあつて面白かった。今も面影が残っているなあ」。あるお母さんからは、男の子が「僕を産んでくれる時、大変だったんだね」と言ってくれて、思わずホロリとしました、という感想をいただいたりもしました。この授業の面白さは、保護者との交流にもあると思います。

そして出産のビデオを観るのですが、この学校の生徒はあまり性教育を受けていません。それに、だんだんと幼くなっているような気がします。「赤ちゃんて、どうやって生まれるの?」なんてマジに聞いて来たりします。「射精って何?」、こんな程度なんです（「やりてー」とか

A組のイメージ

男らしい



- ・背が高い
- ・髪が長い
- ・声が高い
- ・目が大きい
- ・顔が広い
- ・口が大きい
- ・力強い
- ・体が大きい
- ・足が長い
- ・腕が長い
- ・手強い
- ・顔が広い
- ・目が大きい
- ・声が高い
- ・髪が長い
- ・背が高い
- ・力強い
- ・体が大きい
- ・足が長い
- ・腕が長い
- ・手強い

女らしい



- ・優しい
- ・度胸
- ・おしとやか
- ・髪が長い
- ・ケル
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か

3Eのイメージ



- 男らしい
- BEST
- 声が良い
- 足が長い
- 髪が長い
- 目が高い



- お静か
- 髪が長い
- 目が高い
- 声が良い
- 目が高い

女らしい人



- ・マッパ
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か



- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か

3年D組の男らしい女らしい

おとこ



- ・背が高い
- ・強
- ・声が高い
- ・スポーツ万能
- ・眼が大きい
- ・無口ケル

おんな



- ・やさしい
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か

- ・背が高い
- ・マッパ
- ・力強い
- ・色黒
- ・毛深い
- ・のどぼけ
- ・しゃかり



- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か

- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か
- ・お静か



- ・かわい
- ・背が低い
- ・髪が長い
- ・優しい
- ・色白
- ・声が高い
- ・料理が上手

3年B組のイメージ

いつも言っているヤツもいます。)

それで今年も、ちよつと古いのですが、アーニ出版・北沢杏子さんのものを観せることにしました。男女の思春期の身体の変化、生殖器の中でどんなことがおこっているか、受精・着床・胎児の様子、そして立会い出産の様子等のビデオです。でもこの出産は分娩台の上のねそべった姿勢でしたので、その前に、私が第二子を出産した助産院の矢島床子さんが最近出した「助産婦・矢島床子」という本の中から、自宅出産する様子を紹介しました。陣痛をのがすために四つんばいになったり、夫に支えてもらったりの出産です。会陰切開とか破水とかの言葉も出てきます。そのたびに説明を加えて……。教室の空気は静まりかえって、みな真剣です。無事赤ちゃんの産声があがる所では、ホツとした空気が流れました。そしてビデオもはずかしくないように暗い中で観終えました。

〈感想〉

「私も親の中であんなふうに成長してきたのかと思うと、とても不思議」

「男女の生殖器を軽く見ていたが、こんなすばらしいことがおこっているのに感動した。いつか僕も出産に立ち会いたい」

「赤ちゃんを出産するのはとても大変で痛いだろうけど、そのぶん、どんな子に育っても大事にできると思う」

「なんで女ばかり？ 男って楽でイイナ！」

「私は子供は産みたくありません」

一人一人が自分の言葉で心の中を打ち明けて、文にしてくれます(やっつてよかった)。

こんなことまで家庭科でやるの？

毎年のように言われる言葉です。「そうなんだよね、でも、おもしろいでしょ？」これは自分自身への投げかけでもあります。

十五年間やっていても、毎年試行錯誤の連続です。その年の生徒の雰囲気、時代の風、自分の心の持ち方で常に変化してきました(HIVや同性愛を中心に進めたことも)。

でも基本は、私が正直な気持ちで生徒の前に立てることかな。今の私から何かを感じてほしいと願って今日も悩み続けています。

そして私もいつも彼らから何かを感じていきたいです。  
(ふじわら・ゆうこ 東京都公立中学校教諭)



(用意するもの)

YES NO などを書いたボード (画用紙)

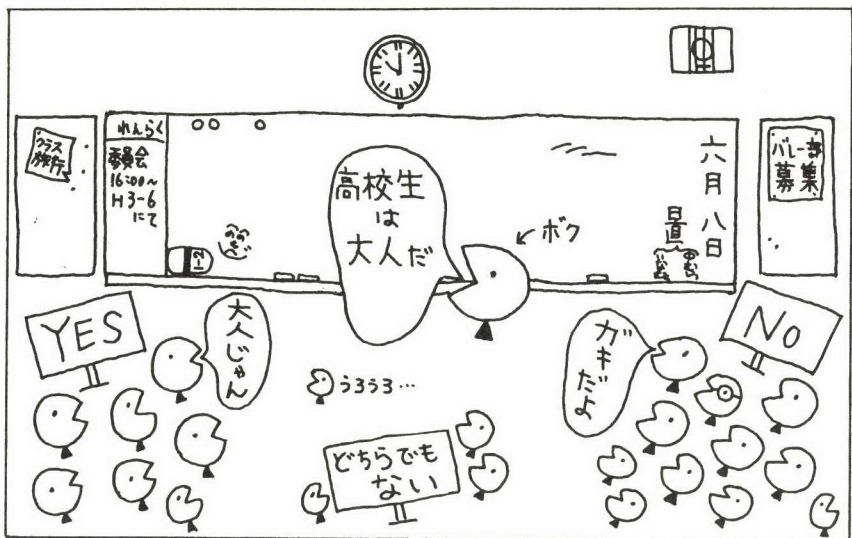
・おもちゃのマイク (意見を言ってくれる人にリレーで渡していくと、いい感じでした)

(やり方)

- ① まず、机とイスを後ろに下げ、スペースをつくる。
- ② 全員が教室の中央に集まる。
- ③ コーディネーター (教員) のする質問に対して、それぞれ「YES」「NO」「どちらとも言えない」「ときどきそう思う」などのコーナーへ移動してもらう。
- ④ それぞれのコーナーの人 (コーナーで1人か2人) に、なぜそう思ったのかを聞く。
- ⑤ 出された意見に対しての質問、反論などを聞く。
- ⑥ 大体意見が出そろったら、変にまとめたりせずに、次の質問にうつる。

※ 出典では「4つの部屋」となっていますが、ボクは「YES」「NO」「どちらとも言えない」の3つの部屋にしました。

※ 質問は「高校生は大人だと思う」「男は女よりもトクだ」「英語を話せることは、国際人としての条件の一つだ」などが面白かったです。



参考にしたもの

by Katoh

「家庭科をおもしろくする本」米山敏裕著 (グローバルエデュケーションセンター)

「くらしと教育をつなぐWe」97年2・3月号 (P. 63 田中勢津子さんの投稿)

このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからの〆掘り出し物〆 (教材や教具、本、ビデオなど) をお待ちしております。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局：加藤昭仁までお便り下さい。(〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869) (かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭)





## 楽市楽座

加藤昭仁



### <4つの部屋>

なんだかんだ言ったところで、やっぱり実習以外では、講義形式の授業を打破できずに、ちょっぴり落ち込み気味の時に会ったのがコレ。『4つの部屋』だった。

面白そうな教材だな～と思いつつも、生徒たちみんなは準備のために、机を後に下げてくれんのかなあとか、ちゃんとYES・NOに分かれて、意見言ってくれんのかなあとか、正直不安の方が大きくて、なかなか授業ではやれないでいた。

でも、思いきってやってみると、コレが予想以上に楽しくって、生徒たちもノッてやってくれたのだ。

『高校生は大人だと思う?』という問いでは、「もう自分の判断でやりたいことができるんだから大人じゃん」(YES派)、「そんなこと言ったって、所詮親のスネかじってるうちは大人じゃないよ」(NO派)、「じゃあ、金さえ稼げれば大人なのかよー」(YES派)、「精神的には大人だけど、経済的には子どもなんじゃない」(どちらとも言えない派)と、女子も男子も言う言う。

ボクはあくまでコーディネーターに徹し、最後に「この教科ってさあ、正解が一つに決まってるわけじゃなくてね、今日みたいに、一つ一つの問いに、自分が自分の正解を見つけてくることが大切なんじゃないかな」としめくくると、「カトーさん、うまくまとめるね～」と男子。

この日の感想文には、「楽しかった。今日みたいに、みんなで話し合える空間がいい」「みんなよく考えてるんだなあとびっくりした。友だちの意外な意見がきけて面白かったし、絶対こうだと思ってたことが、友だちの意見で変わったり、わからなくなったりした。だからすごよかった」等の意見がいっぱい。

やっぱり、生徒たちにとって、関心があって、聞きたいのは、ボク(教員)の考えじゃなく、友だちの考えなんだなあ……というのを再確認したカトーでした。

かるゝい  
家庭科相談室

「相互不可侵」の掟

Y この前、私が言った同僚の先生との「相互不可侵」の話だけど、どうやっていけばいいと思う？ 私は分野だけ決めて後は自由にしたいのだけど。

A これだけではできないというのを最初に言っておいた方がいいと思うよ。

Y やっぱり最初に譲歩すると後が困るかな。

A それは、イヤなものにはイヤと最初から言っておいた方がいいと思うよ。

O そうね、我慢したあげくに最後にプツンしちゃうことになりかねない。

S 落ちこぼれてしまうほうが楽よ。私は新任のとき、先輩の先生の後についてやっていたけど、三、四ヶ月たつともうからだが動かなくなってしまうて、「すみません、もうできないです」と言ったら、「じゃあ、もう好きにやって下さい」とあきらめてくれたの。でも、私も限界に来るまでは言い出せなかったけど。

O Aさんは最初からマイペースだったんじゃないの？

A 私は共修の運動が始まったばかりのときで、同僚は三十年も教えているベテランで、私には別に何も言わなかったけど、私のいないときに「男の子に家庭科なんて、そのうちぼしゃるにきまってる」って言っていたみたいよ（笑）。

Y カリキュラムは学年全体でもう決まってるみたいなの。

T 私は勝手に順序変えてしまったよ。うちは一学期は消費者問題、二学期は被服、三学期は住居と決まっていたけど、私は高齢化問題や家族のことをやりたかったから、一、二学期は言われたとおりのことをやって、三学期は高齢化社会の問題を考えながら最後に住居に持っていくといつて、でも自分の部屋の模様替えの図をかかせるなんて面白くないので、「ごめんなさい、時間切れで最後までやれなかった」と言っつてやらなかった。

I 私はね、教科書をきちんとやる、力のある先輩と一緒にしたけど、くっついていって「ハイ」と言いながら、言われた通りにやらなかった。変わったこととして何かと聞かれたときは「導人です」と言っつて（全員爆笑）。

私はあいかわらず導人ばかりでやつ

ていたら、そのうち自然に、あなたはあなた、私は私、というふうになっていった。

A カリキュラムをみんな一緒にしなきゃと言ったのもおかしいよね。

T 私はお互いに情報交換しながらやりたい。

K そうかな、僕はやっぱり一人で自由にやりたい

T 私のところは相棒の先生が調理1クラス五回もやる。「うちの生徒は食べることに体を動かすことに楽しみを見いだすから」と言うけど、ほんとうにそうなのかなと思うよ。

U 調理実習が苦痛な子もいる、悲惨な話、深刻な話の授業に乗ってくる子もいる。でもね、私、調理実習もね、一緒に作って一緒に食べる場だと思えば構えなくなつた。

Y 社会的なこと教えたいけど、そのままじゃ生徒に受けない場合があるか

ら、砂糖衣でくるんでちよつとずつ出していく。だつて飲みたくない水飲ませるのは拷問じゃない？

T いま、私、それ聞いてすごく反省しちゃつた（全員爆笑）。

U でも拷問好きな子もいるよ。

Y そうそう。両方いるんだよね。

K 家庭科で一年の三分の二もコンピュータの授業やつている人いるけど、生徒がとても楽しんでいっているけど、考えちゃうんだよね。コンピュータの授業、楽しくない生徒もいるはず。

Y 楽しいというのは教員の思いこみだよ。

U 教員はなんだかんだ言つても結局自分の好きなことやるものね。

A でも、コンピュータっていいよね。電源切れば、後片づけいらぬもんね。実習やる度の教室の後片づけやメインテナンス、うんざりよね。

この頁は家庭科教師の悩みにお答えするコーナーです。編集室宛に「悩み」をお寄せ下さい。首都圏家庭科編集室のメンバーが隔月の編集会議でワイワイガヤガヤ話し合つてお答えします。家庭科に興味のある方どなたでも大歓迎。「出ると元気になる」編集会議にぜひご参加下さい。次回は七月です。日程は編集室にお問い合わせ下さい。

## お薦めの一冊

### 『こんなときどうするの?』

ジュニア・グラヴェル/カレン・グラヴェル  
前田京子訳 飛鳥新社1200円

月経のこと、性について女の子たちが聞きたいのに聞けないだろうさまざまな疑問に、楽しいイラストとわかりやすい文章で丁寧に答えながら、自分の体を好きになり大事にできるような肯定的なメッセージを送ってくれる本。学校や家庭で思春期の女の子たちと月経やセックスのことをオープンに話せるためのお手伝いをしてくれる画期的な「月経」の本です。



## 論争

第二回

家庭科の独自性を  
どう捉えるのか？

4月号の小平さんの  
問題提起に応えて

安原 千夏  
篠原 りえ

縁あって一年間一緒に

安原千夏

授業は面白ければ、生徒が喜べばいいの？ やっぱりにそれにこしたことはないと思うよね。でも、「面白い」というニュアンスが難しいところですよ。

勉強のやり方はいろいろあるけれど学校には生徒たちがいて教師がいる。

この利点を大切にするのが授業なのではないかしら。生徒の疑問や悩みを解決する手がかりを引き出せるような授業ができればいいね。学ぶ楽しさを伝えたい。

自分が必要だと思うことはたとえ止められてでも勉強するものです。生徒たちが勉強しないのは学校の授業に必要性を認めていないからだと思います。それでも教室の椅子に座っているのはなぜ？ 学校を卒業することに意味があるからがまんしているんです。

生徒と教員がこの現状を理解しあううえで、この時間をどう過ごすのがお互いのためなのかを考えるしかないのではと思います。

私は生徒に、四月の最初の授業でこう言います。「縁あって一年間一緒に勉強します。お互いによやでも学校をやめる以外にのめられることはできません。同じ時間を共有するのなら楽しくやり

ましよう。だけど、私にはどうしてもみんなに伝えたいことがあります。それは「退屈でもしつかり聴いてくださいね」。教えるとは希望を語ること、学ぶとは真実を胸に刻むこと。

(やすはら・ちか 埼玉県高校教師)

外に聞くことで多様性を学ぶ

篠原りえ

「家庭科には専門性も独自性もなくはない」という言葉を初めて聞いたとき、私はその意味を理解することができませんでした。食物も被服も住居も保育も家庭経営も全て家庭科独自の内容だと思っている私は単純で浅はかなのかなと感じました。

確かに旧来の家庭科では技術の習得を重視し、表面的な内容で終わってしまふことが多かったと思いますし、女子のみ必修であったために、女は家庭

という性別役割分業意識を植え付けてきたとも感じますが、他方、その内容には他教科にはない独自性・専門性もあつたと思います。ただ、もちろん、それをそのまま「男女共修・共学の家庭科」にあてはめることはできないような気もしています。

それで、これからの家庭科の独自性・専門性は何なのだろうと考え始めたら、「生きることを学ぶ」という言葉に思い当たりました。でも、そうだとすると、どの教科でも究極的には「生きること」について学んでいるのではないかと思うようになり、また、家庭科の独自性・専門性はないような気がしてきました。

このように独自性とか専門性とかいう言葉自体が私の中で定義づけられていない曖昧な状態なのですが、ひとつ言えるのは、「生きることを学ぶ」ときには多くの切り口があるので、その切

り口を独自性・専門性だと捉えることも可能だし、それならば、実生活を切り口として、日々の自分の行動や感情を意識しながら生きることを学ぶ教科が家庭科である、ということなのだと思えます。

女子校に勤めている私は、未だに女子のみ必修の状態にいますが、学校から出れば男女共修・共学の家庭科に触れることができ、多くの刺激を受けています。家庭科を変えていかなければいけないと思うようになったのは、その刺激のおかげです。そして、教師が変われば生徒も変わっていくということを実感し、双方が興味深いと感じる家庭科の授業が見え始めてきたところ

です。  
生徒に「家庭科の授業はあつた方がよいか？」と尋ねると、多くの生徒は「あつた方がよい」と答えてくれますが、

「無い方がよい」と言う生徒も一割程度はいます。その理由は「嫌い」「必要と感ぜない」「母に習えばすむ」などです。家庭科という言葉から家庭の内側を想像し、その家庭と密接に結びついている母親の存在に気付く。そこで身近にいる母親に習えることをわざわざ学校の授業として行う必要はない、と考えるのは至極当然だと思えます。そして、私自身もそんなふうに思っていたところがありました。

女子のみ必修の家庭科教育法を履修して教壇に立った私は、すぐに「家庭科はつまらない、意味がない」という生徒の声を耳にするようになりました。そこで、家庭科とは何なのかと考え始め、答えを見つけられないまま時間を浪費してきました。年に数回の調理実習よりも、家庭で母と毎日炊事をする方が調理技術は格段に向上する。さら

に、文化の継承も期待でき、親子の關係も親密になるでしょう。しかし、最近の親は忙しくて子供と会話をしながら料理をする余裕がない。料理のできない親も増えている。子供も忙しくて時間がない。だから、せめて学校で教える必要がある。そんなことしか思い浮かびませんでした。

そのようなときに、男女共修・共学の家庭科と出会いました。家庭には内側もあるが外側もある。その境界は閉ざされてはいない。内から外へ、外から内へ様々なものが移動している。母が居るかもしれないが、父が居るかもしれない。自分が居ると思っている所は本当はどこなのか。自分は何者か、等々、様々な問いを持てるようになり、その答えの方向性を家庭科で見出せるような予感がしました。

家庭の内側だけの視点では、調理実習も作って食べて美味しかったという

だけの一過性の楽しさしか感じられませんが、せん。しかし、外側も視野に入れれば、食物の命が生きていたところまで思いを馳せ、その命を戴いて生きている自らの命に目を向ける。無造作にゴミとして内側から消したのも、環境を破壊しながら再び内側に舞い戻り命に影響を与える、というような物語を発見し、その中に生きている自分について考える、連続した楽しさを味わうことができます。

そして、それらを実習し、体験し、他者と語り合いながら学んでいくことができます。他者の存在から、一人では想像もできない程の多様性を感じ取れるはずですよ。「生きること」を実生活という切り口で学び、知識と技術と感情を融合させて、いつの日か命の智慧となる木の種を蒔き続けたいな、と私は思っています。

(しのはら・りえ 東京都高校教師)

## 投稿募集

今年度の家庭科の頁は、「私の家庭科ラフスケッチ」(3650字)で、「こんな授業をやってみてはいかが」という一年間の授業案を、軽いタッチで紹介。「授業風景―風がかわる、匂いがかわる」(3650字)では、生徒の姿や生徒とのやりとりを中心に、家庭科の授業が生徒にとって、どんな場、どんな機会になっているかに焦点を当てて、ライブ感覚でお伝えします。いずれもご自分のスタイルでご自由にお書き下さい。

「論争」は字数を問いません。共学家庭科をめぐる問題提起でも、それに対する感想でもどんどんお寄せ下さい。

お薦めの教材や資料がありましたら、編集室あるいは「楽市楽座」の加藤昭仁さんあてにお知らせ下さい。

新しいかたの投稿をお待ちしています。どうぞお気軽に名乗り出て下さい。



機械科の三年生で「燻製器」制作がいよいよ始まりました（いきさつは四月号をご参照ください）。授業担当者は機械科の松坂先生ですが、私も頼んで参加させてもらうことになりました。

さっそく知り合いの燻製工場を生徒と一緒に見学しました。燻製器を見て、いろいろな話を聞き、プロの燻製を試食させてもらったりと生徒もますますその気になってきます。工場のおじさんも、この企画を意気に感じてくれたのか、調子よく話をしてくれました。ところが、味付けの核心部に話ぐるところ、「この先は企業秘密でね、ビールでも飲みながらゆっくり話そうや、ワツハツハ」と、結局謎のまま終わりました。

GW明け、まずは段ボールで実物大の試作器を作り、煙をかけてみる事になりました。箱はガムテープとカッターですぐにできました。食品を並べる

中の網と、チップを燃やすコンロは鉄板で作ります。さすが機械科三年生、火花の出る鉄切り丸ノコや溶接などを使って作っていきました。学力はけっ

# 潮風の荒く

江口凡太郎



して高いとは言えない彼らですが、専門実習で学んだ成果は着実に身につけているなあと感じします。

結局、授業時間では間にあわず、燻

製実験は放課後になりました。いよいよ燻製開始。ところが桜の木をノミで削ったり、カンナくずを作ったり、悪戦苦闘で、意外にも火をつけるのに苦労し、どうにか煙が出始めました。素材は「簡単にできるよ」と工場で教えてもらったホタテ、チーズ、ゆで卵。今回は生徒の手がまわりきらず私が下ごしらえをしてきました。燻煙するころで、みんなで試食。

「チーズはいけるけど、ホタテと卵は味がうすい。もっと料理の研究もするべ！」

私が適当にやった下味つけは見事に失敗。でも、生徒のやる気をかきたてたということで、これからに乞うご期待。工場のおじさんと一杯やって秘密を聞き出すことも重要なことかもしれません。一年かけての取り組みですから、つづきは追々報告します。

## ほんとうの「羊たちの沈黙」

映画館で「羊たちの沈黙」を見たほくは、その後ビデオを買い、さらにレーザーディスクまで買い込んだ。

「ずいぶんのご執心ですなあ。惚れ込んだ映画をより鮮明な画面で味わい直したいがゆえにLDにまで手をのびした、そういうことですか」

「羊たちの沈黙」をウエルメイドなスリラー映画ぐらいにしか思っていない冷静な友人は、かすかな憐憫を口辺に漂わせて笑う。

「たしかにそれもあるけど……。勇んでビデオを見たらなんだか肩透かしを食ったような気がしてね、それでついLDを……」

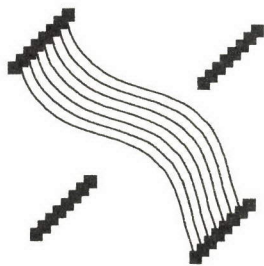
「で、幻滅は癒されましたか、LDで」  
「いや、それがどうもそうはいかなくて……」

「あなたはすぐに、これこそわが生涯の映画のベスト5に入る！と興奮するからねえ。ほくはこれまで何度それを聞かされてきたことか。つまり、惚れっぼいんだね、あなたは」  
「たしかにそれはそうにちがいないんだが……。でも、今度ばかりは狐につままれたようですね」

「映画館の暗闇で、美しい狐にたぶらかされたんですよ。その幻影を追ってビデオを買い、LDを買い、にもかかわらずついに狐はあらわれぬ。つまりあなたは浅茅が宿の廃屋に、光のうすれた有明月をながめながら昨夜の妻を思つて呆然と立つ勝四郎、というところですか」

友人は笑いながら、もはや憐憫をかくそうともしない。

ほんとうの「羊たちの沈黙」はどこかにきつとある。「ポラーノの広場」のファゼーロがレオーノ・キューストにむ



かつて叫んだようにほくも叫びたいのだが、友人にはそれを言うことができない。自信がなく気恥ずかしいのだ。

はじめてビデオで見直した時、ずいぶんひきこまれて見終わったのだ。にもかかわらず、映画館で見た最初の「羊たち」に比べて、どことなく感銘が薄かった。

ほくは映画館で見るのとビデオで見るのとのちがいをことごとしく言い募るたぐいの映画愛好者ではない。子どものころから場末の映画館でずいぶんひどい画質や音声の映画を見つづけてきた自分である。雨のふる画面。読みとるのに苦勞する字幕。上映中一度や二度は切れるのが当たり前だったフィルム——。カタカタカタと音がして画面が白くなり「しばらくそのままお待ち下さい」とアナウンスが入り、やがてまたフィルムがつながれて映画がはじまる、それを暗闇の中で不平も言わずにじっと待って映画を見つづけてきた自分である。茶の間の明るい光の中で電話の音や飼犬の騒ぐ声や老いた母親のゆっくりと風呂場へむかう影を気にしながらそれでも映画をビデオで見られる今の境遇に不満などあるはずもない。だから、「羊たちの沈黙」のビデオについて、「やっぱり映画館で見ないとだめだなあ」と、そういうことを思ったのではない。テレビの日本語吹き替え版がフィルムにはさみを入れてディテールのいくつ

かをカットしそれを巧妙につないで視聴者に提供する、それを見させられた時の不満足に似たものを感じたのである。

何かの錯覚ではないかとはじめは思った。堂々と売られているビデオにおいて原映画がカットされることなどあるはずがない。残念ながらこれだけの映画だったのだらう。映画館で最初に見た時は、なにがどう働いたのか、実物以上の何かをおれは見て勝手にしびれたのだ……。だが、焦立ちはおさまらない。とうとうLDまで買い足してほんとうにこれが自分の見た「羊たち」なのか、ほんとうにカットされたディテールはないのかを究明しなければおさまらない気持ちになってしまったのである。

ところがLDを見ても事情はいっこうに変わらない。画面はほれほれするほど鮮明になったが、内容はビデオと全く同じなのである。にもかかわらず残るこの微妙な不全感——。いったいこれは何に由来する性質のものなのだろうかとほくは考えこんでしまった。

とこうするうちにほくは突然気がついた。獄中で面接したレクター博士の示唆によってクラリスが、博士の患者であり博士によってその胸腺と脾臓を食われた犠牲者でもあるフルート奏者ラスペイルの車を貸倉庫の中に発見し、深夜、押し寄せるテレビ報道陣を相手に毅然と現場を守るあ



の場面、それがビデオには影すら映っていないかったのだ！

錆びついたシャッターをジャッキで持ち上げ、ようやくあいたわずかの隙間からもぐりこんだクラリスが、走り回るねずみにおびえながら蜘蛛の巣をはらって、保管されていたクラシック・カーの中によくやく船乗りクラウスの研究室用標本瓶にアルコール漬けにされた首を発見したというのに（そこまではビデオ版にもちゃんと映っている）、テレビのクルーはうら若い訓練生クラリスをあなどって現場の写真を撮ろうとする。クラリスは怒り、ジャッキに走り寄ってハンドルを動かす。と、シャッターが甲高い軋みを発して下がり、もぐりこんで写真をとろうとしている男の胸にふれる。もうひとつ動かせば男の胸はつぶれる。が、それでも男は出てこない。クラリスはジャッキのハンドルを抜き、それでシャッターをガンガン叩きながら叫ぶ。

「そこから出て。今すぐ。あと一秒で公務執行妨害で逮捕するわよ」

錆とはこりが男の身体にふりかかると。「落ち着けよ」と助手が彼女に手をかける。クラリスは助手の方に向き直り、もぐりこんだカメラマンの足首に乗って、「手を放してさがいれ、この野郎！」と叫ぶ。その瞬間のジョディ・フォスターの懐とした姿―ジャッキのハンドルを手に、テレビライ

トをまともに浴びてすつくと立ったその姿は、ぼくの心に強烈に焼き付いている。ところが、わくわくするその場面がビデオには影すら映っていないかったのである。

クラリスは映画の冒頭からさまざまな男たちによってみつめられつづけてきた。上司クロフォードに呼ばれてクワンティコのFBI本部の裏山にある訓練場から汗にぬれたトレーナー姿で駆け戻る彼女の姿を、男の訓練生の一団がみつめる。クロフォードの命を受けて赴いた病院のチルトン博士からは好色の目でみつめられ、レクター博士の収容されている最重要厳戒棟の廊下を行けば、並ぶ監房の中から男たちの粘りつくような視線にさらされ、「お前の性器カニのにおいがする」と囁く声まで聞かねばならない。そうしてようやくたどりついたレクター博士からは「栗色の、光の反射している部分は針先ほどの赤い点のあつまりのように見え、時折その点が火花のように目の中心に集まるような印象を与える」と原作に描写されているような目でみつめられる。

「彼の目がスターリングの全身を捉えていた」

原作にはそう書かれている。

クラリスは、その目によって、まるで服をはぎとられるようにレクター博士の分析にさらされ、「自分の血を与えて

しまつて体が虚ろになつたような氣」がしてたくたになつて帰る廊下で、ミツグズという男に監房の格子越しに精液を顔に浴びせられまでする。

意志的な青い目と引きしまつた口をそなえたクラリス・ジョーデイ・フォスターは、そうした男たちのまつわりつく視線の波に抗して力泳する健気な長距離泳者を思わせるのだが、そんな屈辱と戦いながらようやく手に入れかけた「現場」を男たちによつてかすめとられそうになつた時——助手の男が「落ち着けよ」とクラリス・ジョーデイ・フォスターの身体に手をかけた時、彼女がそれまで耐え忍んできた屈辱を怒りへと点火し、「手を放してさがれ、この野郎！」と叫ぶその姿は、クラリス・ジョーデイ・フォスターとともにその屈辱を共有しているような氣になつてそこまで映画を見てきたほくのような観客にとつて、非常に強いカタルシスを与える場面なのである。にもかかわらず、その場面がなぜかビデオ化に際してカットされてしまつた。ほくは義憤を感じた。なんてひどいことをするのだ！

ところがそれからしばらくたつたある日、ほくはあつと声をあげた。もしかしたらカットされたと思つたあの場面は、ほんとうに映画にはなかつたのではないか。映画を見終えた興奮のなかでトマス・ハリスの原作を買つて読み、

原作にはあるそのめざましい場面をほくは自分の想像裡に勝手に演出し映像化し、それをいかにも当然のようになりこんで自分だけの映画「羊たちの沈黙」を作りあげていたのではなかつたか。そして原映画に忠実なビデオをしばらく後に見た時に、その部分がカットされたとはかり思つて腹を立てたのではなかつたか……。

ほくは自分がこわくなつた。ほくの心の中のほんとうの「羊たちの沈黙」において、クラリス・ジョーデイ・フォスターは（他のいかなる女優が考えられようか）毅然とライトを浴びて、「下がれ、この野郎！」と叫んでいる。

こんなに鮮明なシーンが、実際はほくが原作を読んで勝手につくりあげた架空のものだつたとは。ほくの心の中のイメージ製造工場は、映画と原作をアマルガムにして強固な自分だけの「羊たち」をつくりあげるといふ、そんな仕事を、本人の知らぬ間に平然とおこなつていたとは。

この夢想する力の強さにほくはほとんど呆れ、かすかな怯えさえ自分自身に感じざるをえない。幼児から持ち来し、映画館の暗闇で長年にわたつて涵養されてきたこの心的傾向は、これから老いが深まるにつれてますます理智の制御の手綱を振り切り、ほしいままな力を嬉々として發揮していくのではないか。

(つづく)

# ワキワキオンぼ 桑良産



毎夜、カエルの大合唱の中で過ごしている。子どもの時から聞き慣れているのでなかなかいい音色である。都会から能勢の山奥に引越してきた人が言ったとか？「うるさくて眠れない」。もし六月にカエルの鳴き声が聞こえなくなったら……なんとも不気味である。雲行きが怪しくなって雨が降りそうになると、一斉にカエルたちが鳴き始める。

日中、田んぼの草刈りや肥ふりをしている時には、アマガエルやトノサマガエルをみかけるが、わんさかぎょうさんいるわけでもない。

もちろん農薬のせいでカエルの数も減っただろう。ところが夜や雨降りるときはカエルの大合唱である。水を張った田んぼに出没するのだろうが、いまでも不思議でない。

「ぎょうさんのカエルたちよ！ 一体おまえたちはどこにいる！」

梅雨といえば、じめじめ・ベタベタ・ネツトリ・じとじとする。ここで登場するのがムカデだ。田んぼにでかけるまえには、長靴を必ず逆さまにして振ってみる。時々ムカデが長靴に入っているからだ。畳の上でゴロンと横になっている時や、深夜まくらもとに何ともいえない気配を感じるとき



がある。

「クシャーシャーシャー？ク「ギョエー！ー！」十五cmぐらいの銚色の奴が這っていることがある。かなばさみでとって洗面器にほうりこむか、湯をかけるか、焼き殺すかである。ところがなかなかムカデはすばやい。深夜にムカデとの格闘は、恐怖感と緊張感とでいっぱいだ。「それにしても、あの鮮やかな銚色はどうだ！ あのしなやかな身のこなしはどうだ！」

五月のこと、年老いた父親と母親が山にでかけて筍を掘ってきたが、すでに大きな穴が掘ってあって筍がとられている。おまけに辺り一面に筍の皮が散らばっている。「筍泥棒や」「いったい近所の誰やる？」といつも夕飯のときの話題にのぼっていた。「おかしいあその山は、近所の人でも知っている人は少ないのに」「だいたい村の人は、一度旬の時期に筍を食べたらすぐ飽きるで」「村の人かてよその山へ無断で入って筍とったら泥棒や！」「都会の人はあんな山までようはいってきいひんで」などなど真犯人の追及に余念が無い。

翌日にまたも母親が山にでかけると今度は筍の地中から顔を出している先っぽが食いちぎつてある。「これは、鹿やで……」。そういえば、家の裏の畑に直径七〜八cmの穴がブツブツあいていた日があった。そうか、夜な夜な鹿が食い物を探しに村里へ出没しているのであった。

すさまじい宅地開発と山林の伐採によって鹿の住みかかなくなりつつあったのである。ここ数年、「能勢」でも鹿の群れが平然と田んぼに出没して人間を恐れず悠然としていたのである。子どもに出会った鹿は、姿を見せるやいなや猛スピードで走り去った。それを数人で追いかけたことを思い出した。ところで筍泥棒の犯人だが、近所の長老いわく「そら猪や！ 猪は筍が大好物なんじゃ！ 筍ぐらい食わしてやれ！ だいたい山は誰のもんでもないんや。鹿や狸や猪が住みにくうなったんは、自然に対する心がけを忘れた人間どものせいや！」

（くわた・よしひこ 豊能図書館館長／題字・版画とも著者）

# 変な子じゃないよね

文-滝野澤直子



イラスト 滝野澤直子

「どうしたらこんなにいいお子さんに育つんでしょう。成績も、性格もよくて、しっかりしていて」  
中学三年の三者面談で担任が母に言った。こんなにほめられたのに、母は「家では、そうでもないんですよ」と素っ気ない。どうして喜んでくれないのか納得がいかない私に、帰り道、呆れ顔で母は言った。「本当にあなたは外面がいいんだから」  
そんなこと言ったって、「学校ではちゃんとしろ」って、みんな言うじゃないの。私は一生懸命にやってるんだよ。疲れるんだから、家に帰ってまでいい子の顔はできないよ。だけど母が呆れるものしょうがないかも。家では、お手伝いは面倒くさがるし、のろのろしていて叱られてばかり。おまけにすぐふてくされて、いつもぶつちよう面だった。

家にいると無性にイライラした。ターゲットは妹。行儀が悪いと言っては叱り、怠けていると言っては叱り、なにかに理由をつけて、エラそうに憤慨している私に、妹は慣れっこになって、どこ吹く風。その態度が気に喰わない。私はいつそう金切り声で、怒って、怒って、怒って……。たまったストレスが晴れるまで怒りつづけた。

いや、怒っていたのは私だけじゃない。その頃まだ若かった父も母も祖母も、たんぽも、我が家はいつもみんなが怒っていた。みんなが一生懸命にやっていたぶんだ

け、家のなかはそれぞれが持ち帰ったストレスで飽和状態。必ず一同に会することになっていた夕食の時間が、おそらく家族の誰にとつても一日で一番苦痛な時間だったろうと思う。

高校生になると、両親はますます口うるさく怒るようになった。キャンプは危ないから行っちゃダメ。男の子と二人で帰ってきちゃダメ。早く寝なさい。早くしたくしなさい。うつつうしくてたまらなかつた私も、次第に「あ、また怒つてら」くらいにしか感じなくなつた。怒っている顔を見ても、怒りの気持ち伝わつてこない。誰かが泣いても、笑つても共感できない。慣れやシラケというよりも、感情の麻痺だつた。相手の気持ちを感じないこと。それは本当の顔でいがみ合うことよりも、ずっとマシなことのように思えた。叱つても叱つても直らず、少し注意するとバカにした目つきで口答える私に、ある朝、両親の怒りは爆発した。

「出ていけー！」父親が私を外へ追い出した。「靴も置いていけ！自転車にも乗るな！家で買ったものはみんな置いて出ていけ！」母は父の後ろで泣いていた。

制服に靴下。靴も持たずに、ボロボロ泣きながら学校へと歩いた。靴下が真っ黒になつて私に驚いて、どこかの主婦たちがこつちを見ていた。早朝の冷たい空気に足も腰も冷え切つて、内股をつたつておしっこが流れても、足は学校へと一歩一歩前に出た。悲しいのでもない。悔しいのでもない。ただ寒かつた。

一時間以上かかつて学校に着くと、迷わず公衆電話のところへ行つた。「もしもし……、ごめんなさい」。ちっとも悪いと思つていないのに、謝る言葉はすらすら出てきた。

「靴を取りにタクシーで戻つておいで」。電話に出たのは出勤間際の母だつたらうか。受話器を置いて、登校してくる生徒たちとすれ違つて歩きながら、私はもう外の顔さえ作れなくなつていた。

(たきのさわ・なおこ)



# このままではいけない？

吉原令子



— アメリカの女と男 —

アメリカに来て以来、「こんなはずではなかったのに」と思うことが何回かあった。日本にいた頃は、アメリカ留学のために英語に磨きをかけなければと無我夢中で英会話学校に通っていた。私に対するアメリカ人の英会話講師の評価は上々で、「君は英語がよくしゃべれるね。アメリカでもうまくやっていけるよ」と言われていた。その言葉を鵜呑みにした私が浅はかだったのか、英会話講師の評価が甘かったのか、アメリカの大学で聞く英語はスピードも早く聞き取りにくい。そのうえ、大学生が話す英語はスラングが多く辞書にも載っていない。相手の英語がわからずに「I beg your pardon」（もう一度、言ってください）を聞き返すと、冷たく「Forget it」（もう、いいわ）と言われてしまう。相手はさほど気にしている様子はないようだが、言われた本人としてはかなりのショックである。そんなことが数回続くと自己嫌悪で立ち直れなくなってしまった。

また、私がアメリカに行って一カ月もしないうちにバレンタインデーがやってきた。アメリカのバレンタインデーは日本と違って、男性が女性にバラの花と一緒にチョコレートをあげ、愛を告白する日である。寮の受

付には風船のついたフラワーアレンジメントやバラの花束がところ狭しと並んでいる。赤いバラを横目に、**三三**、**(こんにちは)**と言つて通り過ぎなければならぬ惨めさはない。日本でバレンタインデイにチョコレートをもらえない男子小学生は学校を欠席してしまうことがあるという新聞記事を思い出した。その記事を読んで「そんなことぐらいで欠席しなくてもいいのに」と思つていたが、私もアメリカでバレンタインデイを過ごしてはじめてその小学生の男の子の気持ちが理解できた。

一方、ボーイフレンドを見つけるための女性陣のアタックもすごい。留学先は中西部の小さな町ということもあつて遊びに行くところがほとんどない。町にはバーが数軒に、買い物も大きな町と違つてしやれた店がない。遊園地などというものはフロリダか、カリフォルニアにでも行かなければならない。では、学生たちは何をしているのかといえば、通称「3S」と言われる *sleep* (睡眠)・*study* (勉強)・*sex* (セックス) である。大学に入学するやいなや、女性はボーイフレンドを見つけるのに忙しい。一九五〇年代のアメリカの大学では、女の子は大学に未来の夫を見つげるために入学しその目的を果たすと大学を辞めてしまうことが頻繁にあつたという。現在は大学を辞めるまではいかないが、彼女たちがボーイフレンドを見つげるために使うエネルギーは私の想像をはるかに超えていた。

アメリカにいて、男性から声をかけられない私は「女として魅力がないのだろうか?」と思うことがあつた。「一人前」の人間としても扱われず、「女」としても見てもらえない性はまさしく「第三の性」であつた。私の「このままではいけない症候群」が始まつたのはそんな時だつた。「このままではいけない、アメリカ人男性からへ女」として認めてもらえるようになるためにはどうしたらいいのだろうか。そうだ、アメリカ人の女性のようになればいいんだ」と思った。その時、私はファッション雑誌に出てくるような白人のアメリカ人女性の中から見本とすべき人物を探しだそうとした。日本人であるというアイデンティティを捨てて……。

セセ  
ツツ  
クスス  
クスス  
クスス  
なわたしたち

西浦 佳代

「貴女、夫のパンツ洗える？」セックスレス歴十年の友だち。「うん、洗ってるよ」。「それならまだ大丈夫よ。私なんか洗えないもの」と、彼女はのたまう。

肩が触れ合うのも嫌な段階から、上には上があるものだ。一つ屋根の下の夫婦の関係がまずくなると、本能的な自己防衛なのか、盛んに自分のテリトリーを作り、守り出す。

口をきかない。食事を共にしない。甘えず甘えさせず、暗黙の自他の境をこれ見よがしに明確にしていく。それは相手への不満の解消であり、離婚できない自分に対する当面の代償行為かも知れない。共存できるぎりぎりの線での生活の話は、耳にするだけでもしんどいものだ。

三度目の危機を迎えた私に、女たちの友情はあらゆることを囁いてくれる。「とにかく働いて、頑張っってヘソクリをきなさいよ」「今出ちゃえば、貴女なら何とかやれるよ」という離婚お勧め派。

「夫の居ない昼間に、好きなことをして我慢すれば?」「もう一度、目をつぶって一緒に寝ることはできないの?」は家庭温存派。「恋人を作っちゃったら」の過激派もいる。



それでも煮え切らない私を他人がとやかく言うのはナンセンスである。不幸な家庭が減り、幸せな家庭が一つでも増えることに本気で打ち込めるのは当事者しかいないからだ。「何が幸せ」かは、やりながらしか分からない。何ができて、何ができないのかを、今この頭で組み立てることなんかできないのだ。

もはや単なるオスメスでは有り得なくなった夫婦には、日溜まりであられもなく交尾するネコほどの自由も、狡猾さも、生命力もない。互いのプライドや信頼などの、癒えるとも思えない傷の向こうで、別離がしんきろうのように浮かんでいるだけである。

寝室を別にしてから五年、孤独の重さを感じることはあれ、夫のそばで寝たいと思う日は一日もなかった。セックスレスなんか恐くない。他人と同じでいるだけだもの。その奥の、もつとおどろおどろしい、他人との間では起り得ないような確執に比べたら……。

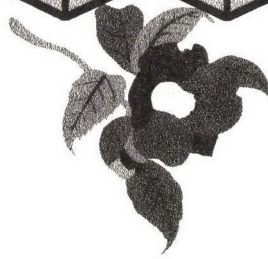
他人に対しては、少なくとも健康な心を持っている。他者の不幸な現実に対し、「お気の毒ね」と思える心を持つている。「ざまあ見ろ」というのはライバルのような例外的な関係ぐらいただが、関係がまずくなつた夫婦には、このテの不健康な相克心理がたえず働いているのである。

そもそも、うまくいかない結婚生活の不幸は相手のせいなのだ。それを忍耐と努力で維持しているのは自分だと、どちらも思っている。それでもうまく行っている時には自己満足があるが、ひとたび風向きが変われば、どちらも簡単に被害者に転落してしまう。そんな時に、加害者である相手に「お気の毒ね」などと思える心のゆとりなど生まれる訳がない。

この腹の底にある敵意は、「あいっさいいなければ」までひとまたぎである。そんな環境の中で子どもが育ち、人間関係の基礎ができるとすれば、これほど背筋の寒いことはないのだ。反面教師を期待し、タカを括っていたとしても、やがて成長した子どもが同じ家庭を作らないとは、誰にも言えない恐ろさが潜んでいる。

「手のひらに小鳥を抱くような」、もともとセックスは、そんなデリケートなものであったはず。それがなぜ今のような関係になったのかを振り返る勇気が、はたして今の私たちにまだ残っているのだろうか。

# 葛森樹の巡業日記



葛森 タツル 樹

癒しにはやっぱり『笑い』が効く。つくづくそう思ったのがフェミックスの『リラクコミュニケーション講座・葛森樹の甘え方教えます』。これは底抜けに愉快だった。

聞くだけの講座も、指示をこなすワークシヨップも結局は受け身。役割の交代がない。主従交代を全員で繰り返せば力のある自分に気がつける。甘えベタは受け取りベタ、表情ベタ。『なぜ?』という苦しみや悩みに拍車をかける分析より、大笑いできる体験の方が優れた解決法だ。問題に巻き込まれている自分を笑えたらいいのだ。そんなまじめなことを考えていたら『お笑い系』ワークシヨップがいに誕生してしまった。

お笑いには神話的舞台が必要だ、ということで当日の会場は本当に怪しい気配。高座の祭壇には蠟燭が赤々と燃え、特別なお香が焚かれる中、チベットの仏教のチベタンベルを鳴らしながら登場したわたしの服装はエジプト直送

の白装束。手には神主の持つハタキ。いったいこれから何が始まるのか? 壺でも売りつけられるのか? 講座慣れた参加者たちも思わず身を固くして行く。『フツツ、可愛いわね。意味なんかないのよ』。思わず教祖の微笑をたえてしまう自分が怖いのが、構うものか、今夜は全員が神様になるのだ!

何種類も用意した神様の衣装を着て二人ずつ祭壇に上がる。悩みを相談する者が前に出て、お祓い(これが私の仕事)後、全員が大まじめにハハアツと神様に平伏し、神様になった人が直観で質問に答えることを繰り返した。これが迷答珍答の数々で、おながが痛くなるほどヒューヒュー笑い転げてすっかり明るくなってしまった。

「平伏されるのって快感! 教祖は一度やったら止められないって言うけど本当よね」。

これは参加者の弁。正直でいいじゃない。好評につき『神様ワーク』第二回も開きます。乞うご期待!



## 居場所考 ②⑦

骨の在り場所が心の居場所？

.....水田宗子

『マディソン郡の橋』は、小説はともかく映画はいい、と武田秀夫さんが言うので、テレビで放映された折りに見た。もともと、クリント・イーストウッド好きの武田さんの意見だから、半分はあてにしていなかった。以前、小説を読んで、そのくだらなさに呆れて、憤慨に近い感じさえ持ったからである。

六〇年代の初め、エリック・シーガルの『ラブ・ストーリー』が『マディソン郡の橋』と同じ位のベストセラーになって、騒がれたことがあった。『ラブ・ストーリー』のテーマは、〈天折〉だった。性愛が簡単になり、恋愛が不可能になった現代で、唯一恋愛を可能にするものは悲恋しかないが、悲恋を成り立たせるのは主人公の死だ。若い主人公をどのように死なせるかが小説の問題だった、とシーガルは語った。かくてヒロインである若い女性は、血液瘤になって二十五歳で死ぬ。出会いがあり、障害があつて、やっと成就した愛のさなかに主人公は死に、その恋愛は永遠なるラブ・ストーリーとなったのである。

恋愛の成立に障害が必要なこと、その障害が二人を引き裂き、離別に追い込むこと、





それによって、恋愛が恋愛として非日常の世界へ物語化される契機を得て、永遠なものとなる。こういう恋愛論の代表的で古典的な例が『ロミオとジュリエット』で、それは西欧文学では自明の論説であった。恋愛の成就後に待ち受ける、〈それから〉のことを考えると、納得できないでもない見解である。

現代社会の若者の恋愛を描いてしまったあとで、もう一度、恋愛小説を書くとするれば中年の男女の恋愛だという、『マディソン郡の橋』の作者の目の付け所はなかなか鋭いと言わなければならないだろう。非日常の恋愛を日常の対関係にさせない、というフランチェスカの決断によって、ふたりは二度と会わない別離のうちに愛しつづけることができた。恋愛物語の常套を、どのように巧みに現代の物語に仕立てるかということだけを目標としたような、『マディソン郡の橋』に引っかかるような読者が今時いるのだろうか、私は読後に呆れたのだが、それはとんでもない見当違いで、小説はアメリカ中の人々の心をとらえて、前代未聞のベストセラーになったのだった。

今回、映画を見て、興味深く思ったことのひとつは、自分の骨灰をマディソン橋の上から撒いてくれるように遺言した母親に、父親の棺の隣に埋葬せず、火葬にしてその骨灰を撒いてしまえば、母親に会うのどこへ行けばいいのかととまどい、絶句する、成人した子供たちの姿だった。恋愛のヒロインである母親は、自分の生きていた時間はすべて家族のために費やしたのだから、せめて灰は彼の骨灰と同じように橋の上から撒いて、魂は彼と一緒にしてほしいと言いつづけた。何年か前に亡くなった彼の骨灰は、母親の日記などとともに遺されていた。

つまり、彼女は夫の横に埋葬されることを拒んだのだ。だから、夫の墓は一人きりだ。夫は、お前にもいろいろな夢があっただろう、それを叶えてやれなかったかもし



れないが、自分はお前を心から愛していた、と言い残して死んだというのに。これは、死による離婚とでも言うのだろうか。骨の在り場所が心の居場所。夫や子供が町まで牛を売りに行っている留守のとき、どこからともなく現れて、フランチェスカの体はともかく、心をすっかり奪い取って去って行ってしまった、クリント・イーストウッドのあの写真家は、彼女にとっては、神のような「まれびと」であるが、夫にとつては、まさに「疫病神」だった。夫は以来、妻の心がここにはなく、どこかよそにあることを感じていたのである。

写真家とフランチェスカの恋を成り立たせたもののひとつに、ふたりがよそ者同士であったということがある。アイオワでは人々に「フラー」と呼ばれるフランチェスカは、イタリア人の戦争花嫁である。あの夏の日、写真家が現れようと現れまいと、フランチェスカは夫に、そしてときには子供に対してさえ、よそ者の他者性を心に秘めていたに違いない。写真家との恋愛は、その内に秘めていた他者性の自覚に火をつけ、意識の表面に引き出すきっかけとなったのだ。

この映画が人の心を打ったとしたら、それは恋愛至上の物語だからというより、自分の心の中に住む「疫病神」、つまり、誰もが結婚や家庭生活の中で心に秘めている他者性を、あらためて認識し直してみる契機をもたらしたからと言えるのかもしれない。日常の時間を生きる中で、誰もがなにか、今はここにはいない、ある時訪れて心を持って行った、不在の「まれびと」との出会いを心の支えとしたことがあるという、そういう経験と記憶があるのではなからうか。彼女の場合も、自分のよそ者性の自覚が、日常生活と心の二重構造を生み出し、異邦人という「疫病神」を心の中に住まわせることになったのである。

(みずた・のりこ)

■連載

## おんなが

### 歳をとるといふこと

木村栄



少し前、古い知人の消息を聞く機会があった、いやもう驚いたのなんの。

頭が切れて仕事ができ、口も八丁手も八丁、威風凛々を払う貫録で生なかの男など寄せ付けず、堂々の独身を貫いてきた、その女性がなんと定年退職後に結婚したというのである。

お相手を知れば、さすがと溜め息が

出るけれど、それにしても何故今更結婚なのか、どうにも腑に落ちなかった。ところが、最近、昔世話になった先輩の葬儀に参列した折り、そここに見つけた懐かしい顔にだぶって十一年も前の職場の情景が蘇り、ふいに思い当たるものがあった。

毎日顔を合わせる同僚と、お天気の話やどうでもいい情報の交換をしたり、上司の悪口を言ったり、ささいな言い合いや冗談の応酬、相談に乗ったり乗られたり、コーヒープレイクを楽しんだり、日常的な固定的な人間関係の中に身を置いていた、あの頃。

職場の人間関係は煩わしいものと相場が決まっているが、一方ではそんなささやかな交歓で心の微調整をして、毎日の元気を保っていたものである。職場を辞めた時、一番辛かったのがそれを失ったことだった。

勝手な憶測だが、知人も定年退職し

てそうした人間関係の場から切り離された寂しさに気づいたのかも知れない。

したいことも行きたい所も時間もある、友人も男友達もいる。だが時間を決めて、会って、別ればそれで終わり。面倒ならどこへも出掛けず誰にも会わなければいい。すべてが自由で、寂しい。その都度何かをすることで得られる関係ではなく、いつもそこにある、連続した時間空間を共有している者でなければ通じないつまらないことを言い合って、束の間の充足を分かち合う仲間。それは多分、職場とか結婚とか、簡単には逃げ出せない半強制的な関係の中でしか得られないものなのだ。

私が老後を考える時に、ホーム暮らしのメリットの一番に挙げるのも、そんなささやかな触れ合いなのである。えっ、嫌だ、なんで私の話はいつも老人問題になってしまうのだろう。



熊本 砂川 真澄

(日本CAPトレニングセンター事務局長)

貴誌の読者であり「日本CAPトレニングセンター」会員の杉田絹子さんから、河村ふみさんが『We』五月号にお書きになった文章のことで連絡を受けました。その原稿を読ませていただきましたが、いくつか気になる点がありましたので、お便りを差し上げます。

河村さんの原稿を読みますと、そのシンポジウムで発生したことが、あたかもCAPが引き起こしたことであるかのように誤解されかねません。この点は重大なことですので、ぜひ訂正をお願いします。

CAPとは、子どもが虐待を受けないように防止教育をするプログラムです。現在、このプログラムを提供するCAPグループは日本全国に三十ほどあり、東京の「グループCAP」はそのなかの一つです。

子ども虐待の問題は複雑で、関連領域が多岐にわたりますが、日本では最近注目されるようになった問題であるため、社会資源がまだ乏しいのが現実です。そのため、CAPに関わる人たちはカウンセリングをしたり、CRやアサーティブトレーニングを行ったり、子どもの人権について活動するなど、CAPと平行して他の活動を行っていることが少なくありません。しかし、それはあくまでも、CAPプログラムとは別個のものであります。ですから、スポーツクラブ事件への取り組みも、「グループCAP」ないしは安藤さん独自の活動であり、日本のCAPグループ全部がこの支援運動をしているわけではありませんし、おそらく全国のほとんどのCAPのメンバーはこのスポーツクラブの事件自体を知らないでしょう（これは、安藤さんがスポーツクラブ事件に取り組んでいることを、JC CAPが批判しているということではありません。

グループ独自の活動とCAPを分けて考えていただきたいという意味です。ところが河村さんは、「CAPの人たちもそうだろうと思っていたからだが、そこが甘かった」(p11)、「子どもを守ってあげてください」というCAPの主眼」(p18)というように、まるでそこで起きたことや話されたことが、CAPとしてやったことであるかのようにお書きになっていきます。その場におりませんでしたので、河村さんの書き方だけの問題にするのは大変気がひけるのですが、正確に言えば、そこで起きたことは安藤さん個人の責任においてなされたことではないのでしょうか。

そもそも、このような混乱が生じるのは、河村さんの文章のなかで、安藤さんの立場がはっきりとは書かれていないためだと思えます。最初に「パネラーにCAPの安藤由紀さん」という表現が使われていますが、これでは、彼女がCAP

を代表しているかのような印象を与え、読み手にとっては、彼女の言動すべてが「CAP」に帰されてしまいます。「CAP」のプログラムに取り組んでいる安藤由紀さんあるいは「《グループCAP》」代表の安藤由紀さん」という表現であれば、彼女の立場も誤解を受けなかったでしょう。

スポーツクラブ事件についての提議をはじめとして、シンポジウム会場で起きたことすべてが、CAPと混同され、誤解が広がることをたいへん危惧しています。ぜひ、その点について読者に訂正してくださるようお願いいたします。

### 河村 ふみ (フェミックス)

私の表現が不適切だったために誤解をまねくような結果になってしまったことを深くお詫びいたします。

私は、シンポジウムが私たちの趣旨からはなれてしまったことを残念には思いますが、それについて誰かを責めるつ

もりはありません。でも、「CAPの」と一括りの表現をしてしまったために、まるでCAPに責任を被せているように受け取られてしまったとしたら、それは本意ではありませんので、ここで、次のように訂正させていただきます。

文中の「CAP」はすべて「グループCAP」に、18頁の「CAPの主張」は、一般的にという意味で、ただの「主張」に。

杉田絹子さんから、「CAPの主張は、子どもを守ってあげてくださいということではなく、子どもが本来持っている力を引き出すための援助の活動であり、あえていうならエンパワーメントだ」というファクスをいただきました。「子どもの力を、また再生力を信じている者たちのあつまりです」とも書かれていて、私はとても嬉しく思いました。

安藤さんも、グループCAPも、そのところは同じだと私も思っています。シンポジウム以外での活動も見せてもらっていますし、そうだと思っていたから

こそ、あのシンポジウムの企画段階から安藤さんに関わってもらったわけです。

ところが、あのテープから伝わってきたのは、「子どもの力を信じる」というのとは全く逆の、「子どもを守ってあげなくては、守れるのは母親しかいない」というメッセージでした。それが残念で、それは何故だろうかということも、自分なりに納得したくてあの記事を書いたのです。

あのテープを聞いたとき、子どもを守れなかった自分自身を責め続けているお母さんたちの姿が見えてきて、あれでいつまでも解放されなくてつらいだろうなと感じました。子どもの再生力を信じるためには、まず、自分自身を再生させないと、そのためのサポートこそが優先されるべきではないかと思いました。

また、もともと母性信仰の強い日本の土壌では、母親が「子どものために」といつて何かをするときに、当然陥りがちな問題でもあると思いましたが、あえて書いておきたかったので。





■連載

「おんなが歳をとるといふこと」木村栄

「シネマの魔」武田秀夫

「変な子じゃないよね」滝野澤直子

「いきいきごんぼ」桑田良彦

「このままではいけない？」吉原令子

「蔦森樹の巡業日記」

「セックスレスなわたしたち」

「居場所考」水田宗子

■女と男の家庭科新時代

「フェンスをこえて」小平陽一

「私の家庭科ラフ・スケッチ」

「授業風景－風がかわる匂いがかわる」

「楽市楽座」加藤昭仁

「かる～い 家庭科相談室」

「共学家庭科 論争」

「オホーツクの潮風荒く」江口凡太郎

くらしと教育をつなぐWe

1997年6月1日発行 第6巻第3号(通巻53号)

定価630円(本体600円)年間購読料6800円(送料共)

郵便振替 00130-7-754314フェミックス